幻獣ぱれっと!

橘　猫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻獣ぱれっと！

【Ｎコード】
Ｎ３８５９Ｚ

【作者名】
橘　猫音

【あらすじ】
意味の違う転生モノファンタジー
転生魔術の発達したこの世界では、
『幻獣』『境獣』と呼ばれる生き物が
ヒトの形に転生されて、奴隷として扱われている現状があった。
主人公は、独善意であるギルドに所属するが…
作者の趣味全開な、個性的なキャラクター
微エロ表現を絡ませたストーリーなど、
趣味爆走、妄想爆発な作品となっておりますｂ

作者と趣味が合うかどうかはわかりませんが
会う人が沢山居れば嬉しいです（＊´∀｀＊）
レッツ同士１００人の道！↑

年も明けたという事で
新作でロボバトルモノも作りたいなぁと思ってる訳ですよｗ
まぁキャラ絡み的に
世界三分割？的なニュアンスで
幻獣ぱれっと！の方と絡ませたいなぁとか思ってる訳ですｗ
まぁ幻獣ぱれっとのほうが安定してからかなぁ

キャラ紹介：随時更新予定＆ネタバレ注意ッ

個性豊か（にしたかった）なキャラクターの紹介です
今まで放ったらかしにしてたからなぁ
というわけでご覧あれ～

主人公（通称：シュウ）　性別：男　年齢：２４　職業：雑務、その他　人種：通常人種

某大学、幻獣学部卒、第一話で話した通りの現実が許せずに、独善意で行動に出るも、女の子を保護する（拾う）、大蛇に襲われるなど、移動中にも困難苦難、悪運の尽きない男である。

内面はすっかり変態だが、表にだす勇気がないので、ムッツリのまま止まっている。

夢はギルドの正式役職に付くこと（実はハーレムを楽しむことなのは秘密だ）、希望は自分の本名を覚えて貰う事だが、今のところ、本作品中では、誰一人として彼を「シュウ」意外の名前で読んだことは無い。

個性豊かな脇役（キャラ）のなかで、どう平凡な自分が生きていくか、終始考えている。

ルティアメルラ＝ツヴァイテッド＝アシュラルメイラ（通称：ユー）

性別：女　年齢：１１　職業：ギルド幹部（仮）　人種：半転生人種（ケット・シー）

とある事情で行き倒れになっている所を、主人公（シュウ）に拾われた。いつもニコニコ笑っている上、声も幼く甘ったる声なので、何も考えて居ないように思われがちだが、意外と考えてる娘である。

これまたとある事情で、半魔になってしまい、人間からも、集落からも見放されるという、辛い過去があるが、主人公に拾われ、ついて行った先のルーザンマードルでは、いつの間にかしっかりギルドにも所属し、幹部の列に混じって並んでも違和感が感じられないという逸材である。

基本服装、容姿は、黒いワンピースに長く伸ばした黒髪、黒いネコミミと黒い猫の尾が生えている、幼い顔立ちの幼女。
第１０部では、作者の趣味で、『Ｔシャツ一枚』を実現しようとしたが、あくまで全年齢対象の小説なので、『大きいポンチョ』という、至って普通の萌要素を披露させて頂いた。

半魔なので、自分の意思で、「ケット・シー（猫の姿をした幻獣・妖精）」の姿を行き来できる。
ケット・シーになった時の容姿は、しっぽの先から、頭まで、生粋の黒猫である。

雲村鳴葉（くもむらなるは）　（通称：鳴葉さん　鳴葉　姉さん［あねさん］）
性別：女　年齢：非公開　職業：ギルド幹部（０２転生小隊隊長）
人種：転生人種（マンティコア）

趣味はお菓子作り

移動中、ボーティス（大蛇）に襲われているユーを救助した。普段から冷静沈着だが、街の中では明るく振舞っている。ただし人見知りが激しく、主人公から言われるまで、主人公には敬語で話していた。

更に、酒癖が悪く、酒が回ったときの人格崩壊が酷い。第１０部では、主人公の首に舌を滑らせるシーンさえ…

仕事では、幹部の中でも特に、統率力、リーダーシップを持つ人材で、弓の名手。

術式の中でも難しい、魔法矢を見事に使いこなす。

基本服装、容姿は、ワイルドチャーム（緑とカーキの弓士用の服）に揉み上げと後ろ髪を長く伸ばした、緑色のしなやかな髪、背中にエメラルドグリーンの身の丈程の大きさの翼を持つ、淡麗な顔を持つ美女。

第１０部では、スカート丈の凄く短いメイド服に着替えるシーンもあった。

実は酒を飲むシーンでは、毎回コスプレさせようか、という計画を練っている事は秘密だ。

唐草空音（からくさそらね）　（通称：空音さん　空音）

性別：女　年齢：非公開　職業：ギルドマネージャー　人種：転生（レッド）人種（ドラゴン）

別名、邪道竜王空音。戦闘に参加すると何をしでかすか解らない邪

道王。

普段から笑顔で明るく接しているが、彼女の言動にはイマイチ遠慮が無い。

転生前の姿に戻る事が出来る呪文を駆使し、正に一騎当千だが、周りの自然や、仲間まで犠牲になることがあるので、現在はギルドマネージャーとして働いて居る。

基本服装、容姿は、ギルドマネージャーの制服（黒地に赤のサラッとしたデザイン）を着た、真紅の髪を、真紅の目、真紅の羽を持った、胸の豊満に育った爆弾ボディの、ほどよく白い肌意外は全身『紅』のお姉さん。

ポンチョや、ダッフルコートのぴったし似合う女性である。

第１０部では、鳴葉と一緒にメイド服に着替え、男性数人を貧血による殺害をした。

クルヤ＝マーティクシィス　（通称：クルヤ）

性別：男　年齢：２４位　職業：軽装部隊副隊長　人種：通常人種

ロリコン。第七部では、ユーに「どんなパンツ履いてるの？」と質問し、シュウから足払いを喰らい気絶、それ以来の登場は無い。

一言二言多く、良く鳴葉さんから殺されかける。

基本服装、容姿は、ライトアーマー（機動性を重視した鎧）を装備した、オレンジ色のツンツンヘアー、オレンジ色の瞳の主人公と同じ位の身長の男。

コスプレ予定は勿論無い。

アルエ＝ルディアヴァルト　（通称：アルエ　アルエちゃん　天才少女）
性別：女　年齢：１２　職業：メカニック及び、機動部隊隊長　人種：転生人種（グレムリン）

全長５～６メートル程の、純白のマシン（後説明）『サイククロティスＮｏ．０２』を乗りこなす、実践派メカニック。

作者の妄想爆発趣味暴走により、天然兼、ボクっ娘になってしまった。普段から空調設備バッチリの屋内、又、空調設備完璧なマシンの中でのみ活動するので、大抵、薄着&肌着である。

第八部で、ユーにマシンに潜り込まれ、胸を揉まれた為、ユーを危険視中。

基本服装、容姿は、肌着、タンクトップなどの上に白衣一枚の寒そうな格好。銀髪ショートヘアにゴーグルを装着している（これも作者の趣味だが）。メカニックの為、多少体にススは付いている。だが、太陽の下に基本的に出ないため、肌は病的に白い。

飲み会は神聖な場だと言い切り、巫女服配色の上羽衣に同じ配色のミニスカート、白のハイニーソという服装（グレムリンの正装）で参加する。嗚呼、作者の趣味全開キャラですｗ

サイククロティスＮｏ．０２　（通称：サイククロティス０２　白いマシン　純白　など…）
性別：不明　年齢：不明　職業：戦闘用・アルエ専用マシン　人種：マシン

地上戦闘用にカスタマイズされた、『サイククロティス』。足の長い、全長５～６ｍ位の、近未来的な真っ白の人型マシン。外部スピーカー搭載。

搭乗者が機体から出るときは、頭部が開く。つまりコクピットは頭部。

５～６ｍのマシンとは思えない程、巨大なキャノン砲、２５５ｍｍキャノン砲を主砲として、その他にも、レーザー、支援用サポーター、実体剣など、多数の武装を備えている。

必要に応じてバックポットを装着する事も出来る。操縦にはかなりのテクニックを要する。

序章：俺が今から始める事は

見ていて気分を害すな…

幼い女の子にムチを振るい、田を耕させているのだろうか？　労働を強いらせている３０代後半の男が、俺の家の窓から見える。

息を切らしながら、田を耕す麻布の服の少女の頭には『犬ミミ』が付いている

察するに彼女はメフィストの『転生人種』だろう

三分割された世界のうち、俺が住む『ココ』北ファイセクト大陸には、『魔物』がいる

魔物と言っても多くの人が想像するだろう、ス〇イムやド〇キー（〇には同じ言葉が入る）みたいな人を襲うようなことしか頭にない野蛮な生物のことではない。

『幻獣』と呼べば思い浮かぶだろうか？

そう、古（いにしえ）からの神話に出てくる『ユニコーン』とか『ペガサス』とかそういう類いの動物だ。

幻獣は変異種も含め、約１３６０種以上の種族がいる。

幻獣たちは決して人の手の加わった土地には決して踏み込まない。

これは古くからの人間と幻獣の、暗黙の了解だった。

そう、幻獣たちは決して踏み込まない。

だが、１３６０種もの幻獣とは別に分類される、人間に害を与える獣、そう、それこそス〇イムやド〇キーのような獣、『境獣（きょうじゅう）』がいる。

境獣は幻獣たちのおよそ三分の一ていどの４８０種程度の種族しか居ないが、大きな魔力、物理的な力を持つ境獣は一匹でも人間の大きな驚異になる。

幻獣も境獣も勿論『獣』だ。どちらも人間とは姿も言葉（多くの獣は鳴き声、テレパシーである。また、ワルキューレなど一部例外もいる）も違う。

君には「なら何故さっきの犬ミミ少女は人間の少女の姿をしていたのだろう」という疑問が残るだろう。

詳しく話せば長くなるだろうから、手短に話していこうと思う。

十数年前に、ロイルマナレスト大学幻獣学部の教授、ウェルト＝ダイルが、境獣を殺さずに安全化する為の方法として『境獣転生』の方陣を完成させた。

『境獣転生』ていうのは、まぁなんだ、簡単に言うと「境獣を人間にする」っていう概念の呪文だ。

まぁ長年の研究で境獣の魔力や力学的エネルギー、容姿の特長を完全に封印することは出来ないことは解ったらしいが。

手順も簡単に説明しようと思う。

まずは境獣を弱らせて、なんらかの方法で転生方陣の中心に誘導、移動（ヴァジュラなど一部の容姿を変更する境獣の場合は対象を中心に方陣を書く場合もある）させる。

その後拘束魔法を唱え、境獣を拘束し、転生魔術を唱え、方陣からドーム形に白い光が出て、暫く鳴き声や喘ぎ声、他にも色々聞こえるが、3分後には光も消え、方陣の中心には人間が倒れている、と

そんな感じだ。

この方法で「人」になった境獣は魔力に限界があり、一定ベクトルのエネルギーを越えると、動けなくなってしまう。つまり、人間に逆らうことができない、人間より弱く見られる彼らは劣性人種とみなされ、大抵は奴隷として労働を強いられる。

そこで色んな大陸のお偉いさんが考えたわけだ

「転生人種は力も強くて、労働に使えるな、でも転生にはリスクが大きい。どうにか簡単に確保出来ないか？」

ってね

んで此処からがご都合主義本番な展開だ。

某年のある日、親とはぐれ、町に迷い込んだ子供のクリウス（熊に似た幻獣）がパニックになり、暴れている所に転生術士が通りかかって転生魔術をかけたら、くまのフードコートを着た女の子が出来た。っていうニュースが流れた。

そんな事件があったもんで大陸間協議なんかがあって、激論の末、

森に立ち入って幻獣も人間にして奴隷にしまおうって計画が出来た。

そんなこんなで…いまの現状がある。

嗚呼、考えただけでイライラする。

まぁなんていうか、幻獣学部卒の俺が動かない訳にはいかないだろうって事で、ちょっとばかり行動にでることにした。

そう、保護団体に入る事にした。

今チャッちぃな、って思ったろ？

チャッちくなんかないぞ。俺が入る幻獣保護団体は

『転生人種入団可能』の特殊ギルドだ。

おっと、もうこんな時間か、ギルドのある町までの出発は明日。

詳しくは明日歩きながら話す事にしよう。

移動中：俺と黒猫の話

ガチャり

鍵もかけた…っと

暫くはここには帰ってこないから戸締まりはしっかりしないとね。

さて…今は早朝三時、まだ日も昇ってない、嗚呼、寒くて凍え死にそうだ…

だが今出発しなければ、今日中に町まで到着出来ないだろう。

…それではさらば懐かしの我が家よ。

荷物は最小限に抑えたから、足取りも軽い。

そういえば昨日ギルドについて詳しく話す　とか言っていたのだったな。

今日はどうせ歩くだけだ、少し詳しく話そうと思う。

俺が今から行こうとしている町、ルーザンマードルは俺の住んでるここ、カヌ村から約徒歩１７時間の所にある。

ルーザンマードルは市場や最高クラスのレストラン、服屋など、商業が盛んで、観光でも人気のある町だ。

だが、勿論俺は、美味しい料理を食べたり、お洒落をするためにわ

ざわざ行く訳じゃない（ちょっと観光もしようと思ってるのは秘密だ）。

俺がルーザンマードルに行くのは「ギャザリングギルド　ルーザンマードル支部」に所属する為、申請を出しに行く為だ。

ギルドというのは、境獣の討伐依頼、転生依頼などを受け持つ町営施設（または村営施設）だ。

『転生』は嫌いだって昨日言ってたじゃないか　と思う人も多いだろう。

ただギルドに所属したいだけなら、俺の村にもある。

だが、大抵のギルドは転生依頼を受け、境獣の転生を行った後の境獣人種は、奴隷として競りにだす。

更に、お偉いさんからの「幻獣を5～6匹転生して売ってくれ」という不正な依頼すら普通に受ける。

俺の村でもそうだった。

だがルーザンマードルのギルドは違う。怪我をした幻獣を保護、必要に応じて転生し、転生させた幻獣はルーザンマードルの住民として登録し、保護している。

さらに境獣の討伐依頼は一切受け付けず、境獣はすべて転生し、住民登録を行う。

更に、普通のギルドには転生人種の入団は許可されない。

だが、ルーザンマードル支部は、転生人種もギルドへの受け入れを許可し、依頼を与えている。

そのうえ、転生人種保護条例を作り、通常人種と対等の生活を約束している。

しかもギルドの受付はレッドドラゴン種（超ド級の幻獣）から転生した、龍の羽の残っている朱い髪の綺麗なお姉さんが担当しているそうだ（決してそれが目的ではない）。

他の地域から奴隷から解放されるため、亡命してきた転生人種に対しても受け入れ体制をとって、生活を保護している。

最高じゃないか、ルーザンマードル。　美しいじゃないか、ルーザンマードル。俺もルーザンマードルのギルドで…

って…ん？　なにか…　なんだ？

なにか黒い、黒い…布か？　なにやら異質な物が草むらに落ちて（？）いる。

小型の魔式ナイフをとりだして、警戒しつつ、近付く。

一歩…　一歩…

黒い物体を上から見下ろす。

黒い猫の体に　黒い猫ミミ　黒い猫の尻尾が２本…

「なんだぁ…布じゃなくてケット・シー（猫の小型幻獣）かぁ…ってえぇ！？」

思わず声を出して自分にツッコんでしまった。

倒れてる？　し…死んでるのか…？　おーい…って声かけても解らないか…

そうかぁ…せめて埋めてあげるか…

持ち上げようと手がケット・シーに触れたとき

「にぅ…」

いっ…生きてるっ！　急いで…えーと…　あー　そーだ！

「神よ！この者の命尽きるのは余りにも早いとお思いになるのならば力を貸したまえ！」

ヒールの呪文が発動し、ケット・シーを澄んだエメラルドグリーンの帯状の光が取り巻く。

良かった…成功だ。

「にぇ…」

取り合えずこのケット・シーはギルドまで連れていこう。

振動を与えないよう、ケット・シーをそっと抱き上げる。

いやぁ…まさか行き道で幻獣を保護するとわなぁ

などと考えながら、森に差し掛かる前まできた。

幻獣を保護した達成感に浸りながらケット・シーを見る。

「それにしてもこのケット・シーよく眠ってるなぁ…ってえぇ！？」

思わず声をあげてしまった。

俺は気付いたら、１１歳位のネコミミの付いている、黒いワンピースを着た幼い黒髪の白いのは肌位だろう、そんな容姿の女の子を…お姫様だっこしていた。

しかも目を擦って…お目覚め真っ最中の…

「ふぁぁ…にゃぁ…ここは…？」

固まる俺　どうすればいい。　なんでだ？　俺は転生魔術なんてかけてないぞ？

「にゃっ？　なにこれ、にゃぁ、下ろしてよぉ！」

腕の中でじたばたする女の子　固まる俺　じゃなくて

「あっ　ゴメン」

慌てて地面に下ろす俺。

「お兄さんがここまで連れてきてくれたのかにゃ？」

取り合えず訳を話そう。聞きたいことは沢山あるが、質問はそれからだな。

「あぁ、うん、ルーザンマードルまで行く途中に（以下略）」

ヒールを使ったこと、拾った時の状況　みんな話した。

「なるほどぉ、にゃぁ、お兄さんは命の恩人だね！　ありがとにゃぁ　お兄さん♪」

可愛い…　可愛いぞ…っとイカンイカン質問を忘れる所だった。

む、誰だロリコンだって言った奴は！

まずは…この質問からかな…。

「ところで…お嬢ちゃん、ケット・シーが倒れてると思ってここまで連れてきたんだけど、なんでその格好に成ったの？」

ケット・シーの女の子は顔を伏せ、ふぇ…　くすん…といって目を潤ませる。

し、しまった…　地雷を踏んだか？　まずは質問を変えろ！　名前は？身長は？なんでもいいから早く変えるんだ！

「じゃ…じゃあ、お嬢ちゃん、どんなぱんつ履いてるの？」

墓穴を掘った。焦った俺の口からとっさに出た質問は「どんなぱんつ履いてるの？」だった。　あぁ…終わった…

女の子が口を開く　あぁ…叫ぶのかなぁ…俺は逮捕かなぁ…　南無三…運が悪かった…

「今日は私ぱんつ履いてないの…えへへ…」

「へ…？」

なにが起きたか解らず、ぽかんとしていると、ほら…と言ってネコミミの女の子はワンピースのスカートを捲り…　涙目で微笑み、スカートを捲る姿は…これじゃあ俺が幼女をなんかのプレイで虐めてるみたいじゃないか。　これはこれで…興奮する…！　じゃなくて困る。　誰だ、「このロリコンが！　その娘に触るな！」とか言った奴は。失礼な。

「解った！解ったから！まずスカートを下ろして！」

ずっと涙目でスカートを捲っている幼女を見ている訳にもいかないのでスカートを下ろさせる。

「う、うん…解った。」

といい、スカートを下ろす。　まず…なんだ…えっと…　この娘ももう大丈夫みたいだ。これ以上に関わったらろくな事がないきがする。

「じゃあ、大丈夫みたいだし、俺はそろそろで行くけど…お嬢ちゃん、家まで一人で帰れるよね？」

じゃあね、といい、歩き始める。

だが…俺をあの娘が　お兄さん！　と呼び止める。

「お兄さん…以外と冷たいんだね…」

ぐっ…　時間がヤバいんだが…しかし流石に罪悪感が募る。

「じゃ…じゃあ…お家まで送っていく？」

「ねぇ、お兄さん、ルーザンマードルまで行くんでしょ？なら私も一緒に連れてってよ…？」

なにを言い出すんだこの娘は、一人で亡命したならそれは認められる。だが、俺がつれてきたと成れば…本来の彼女の主人に拉致罪で訴えられれば俺はギルドに所属出来ない。それこそ終わりだ。

「お、お嬢ちゃん？でも突然居なくなったらお家の人心配するよ？」

この娘は転生人類だ、奴隷として扱われる彼女を心配する人なんて…　だが、なんとか回避しなければ。

「心配なんてしないよ…家族とはもう…もう会えないから…」

「…え？」

『もう会えない』この娘の言ったこの言葉には、「奴隷の私を心配する人は居ない」という意味は込められて居ないようだった。それには純粋に、「家族に会えない哀しみ」の気持ちしか入って居ないように感じられた。

「うん…さっきお兄さん、なんで私が人になったか…不思議がって

たでしょ？　話せば信じてくれるかも…辛いけど…話すね」

彼女はうつむかず、涙を堪えて話し始めた。

「私はね、半転生異常種なの」

半転生異常種　それはたしか、バハムートとか魔力がとてつもなくを魔力が削りきれずに転生させたときに稀にできる、魔獣と人を自由に行き来できる、いわゆる「転生失敗」で出来る墜天種だったはず。

「私はね、ルク村の近くで転生魔術を受けたの、その時に、魔術士の人はめんどくさいからって私ともう一匹、2匹まとめて魔術をかけちゃったの。それで魔力の合計に足りなくて失敗して、私は半転生異常種になっちゃったの。使えないからって、人間からは捨てられて、森に帰ったら、転生魔術を受けたからって民族からも追放されたの。だから私は『失敗作』になったせいで家族とももう会えない…ふぇっ…」

そこまで言って話し終えた彼女は泣き出してしまった。

はたしてルーザンマードルで半魔（半転生異常種）の転生人種を受け入れてくれるかは解らない、でも…だとしても

「解った。一緒に行こう。お嬢ちゃんを一人にしない、約束する。ちゃんと守るから。」

どちらにせよ、弱者を見捨てるような男にどちらにしろギルドに入る資格はない。　彼女の頭を撫で、誓いをたてる。

「…ほんと？」

顔を上げた彼女と目があう。

「あぁほんとだ。さぁ、一緒に行こう。」

手を差し出し、彼女を立たせる。

「お兄さん…にゃぁ…有り難う…えへへ…やっぱりお兄さん…いい人だったね…♪」

彼女は涙を拭い、微笑み、立ち上がり、「さ、お兄さん、いこう」と言い、歩きだす。

おう、と反応し、小走りに追いかける。

横に並んで、歩く二人を、優しい木漏れ日が照らしていた。

移動中：碧髪の弓師と大蛇の話

彼女と色々な事を話しながら歩いた森を抜けた頃には、延々と続く彼女との問答のお陰もあって、俺も彼女もお互いの事を大分理解していた。

話しによると彼女の名前は人間の言葉に直すと「悠（果てしない、ゆっくりした）」という意味の言葉らしい。本名も名乗って貰ったが、難しくて覚えられそうにない。確か「ルティアメルラ…なんちゃら」だった気がする。まぁ到底覚えられないから、俺は彼女の事は「ユー（ゆう）」とよぶことにした。

ユーに俺の名前を教えたところ、必死に俺のあだ名を考えたあげく、結局名前の一部を取り「シュウにぃ」と呼ぶことにしたらしい。やはりある程度転生後の見た目に年齢は関係あるらしく（１億２００万年生きた魔物境獣が妖艶なお姉さんに転生したこともある、そこら辺は謎なのだが）、彼女の年齢は動物年齢にして１．７歳、人間年齢にして１１歳、だそうだ。

更に、人間と幻獣の姿はある程度、自由に行き来出来る事も解った。

そういえば、子供の頃は周りの人からは「シュウちゃん」なんてて呼ばれてたなぁ、なんてしみじみとしていると

「シュウにぃ！　にゃぁ！　街だよ街！　おっきい街がみえるよ！」

ユーが言った。

確かに３ｋｍほど離れた所の草原の真ん中に低い壁に囲まれた街の

ようなものが見える。

「今は…夜の１０時か。以外と早く着いて良かったな、ユー」

「うん！　シュウにぃ速く！　遅いよっ」

いつの間にか黒猫の姿になり、ぴょんぴょん跳ねながらかなりのスピードで走るユー

「走るなよ、転んでもしらねーぞ？　！！　ユー！　あれは…　あッ！あぶねぇ！止まれ！」

「へへーん　なにも無いところで転ぶほどバカじゃないよー」

あぁ、遅かったか

後ろを見ながら走っていたユーは…　前が見えず不意に野生のボーティス（巨大な蛇の境獣）にぶつかり、思わぬ衝撃によりユーは黒猫から、少女の姿に変わる。

ボーティスは猛毒のキバを持つ大蛇の境獣だ。それこそ…ケット・シーなどキバに触れるだけで死んでしまうような。

「逃げろ！　速く逃げるんだ！」

しかし、ユーが動くよりも速く、ユーは尻尾を巻かれ、締め上げられる。

「しゅ…シュウにぃッ…くぁっ…」

ユーが苦しそうな声で俺に助けを求める。俺は魔式ナイフをとりだし、拘束術を唱えようとする、だが、遅かった。

「ユーーーーッ！！」

俺は叫ぶことしか出来ない。

ボーティスは思わぬ獲物に、毒の滴るキバをむき、少女の姿になったユーに巨大なキバを振り下ろし、キバがユーを貫く。

守れなかった…目を瞑る。キバがユーを…貫く。いや、貫くはずだった。

カカカカンッ　その時軽やかな音がした。俺が目を開けた頃にはボーティスの固い鱗に何本もの術式矢（一定時間すると消える矢）が刺さっている。

キュイィッと甲高い声で鳴き、ボーティスがグネグネと動き、ユーは尻尾から放り出され、地面に叩きつけられる。

それとほぼ同時に太いボーティスの胴体の反対側の少し離れた場所から「向こう側の貴方！速くその娘を連れてこっちに！」と、凛とした女性の声が聞こえる。

何が起きたか解らず固まる俺。いや、今は考えている暇はない！！

一気に飛び出し、俺の方に逃げてこようとするユーを抱き上げ、止まらず声のした方に走りだす。

人を抱き抱えたまま最も速く走れる格好、自分の足下だけを見て、前傾姿勢で走り続ける。

１３秒程度走った所で人の影を前に確認し、止まる。

「はぁっ…はぁ…　助かりました…　ありが…！？」

声の主をみて、述べている礼が一瞬止まる。

私を助けてくれたのは、「緑色のしなやかな髪の、揉み上げと後ろ髪を長く伸ばした、背中にエメラルドグリーンの身の丈程の大きさの翼を持つワイルドチャーム（緑とカーキの弓士用の服）を着た、銀の装飾の施されている弓を持つ、端麗な『美女』」だった。まぁ正確に言えば俺を助けたのは彼女率いる魔法弓士団なのだが。

「礼は良いですから、速く結界の外に出てください。」

俺の足に弓先をむけ、美女が言う。気付かなかった、ハッとして見ると、いつの間にかボーティスを中心に転生方陣が描かれ、ボーティスには拘束術により発生した鎖が絡み付き、動きを封じている。ハッとして方陣から出る。

「それでおーけーです。　では、コホン、神よ、哀れな獣に新たな身体と精神の反転を与えよ！」

美女が呪文を唱える。その瞬間、転生方陣の縁からマーカーグリーンの光がドーム型に広がり、ボーティスを囲う。

ん？なんだろうこの違和感…

光…そうだ、出ている光の色だ。普通の転生方陣から出る光は普通の光だった。それに…この転生、鳴き声も喘ぎ声もその他色々も聞

こえない。

結局、何故なのが3分間考え通したが、結論にまでたどり着かなかった。

光が消え、方陣の中に倒れている人の姿が見える。

方陣の中心には、薄紫色のセミショートの髪の、鎧を着た、やや背の低い妖艶な女性が海賊の持つような剣を持って俯せで倒れていた。

「さぁ皆さん、お仕事お疲れ様でした。大物を仕留めたのですから街に帰って…今夜は飲みましょう♪」

美女の呼び掛けに

「いいねぇ！　今夜は飲み明かそうぜ！」

「姉さん（あねさん）が行くなら俺も行くぜ！」

「お疲れぇ！今日は美味い酒が飲めそうだ！」

弓士団の面々がそれぞれ別々にいう。

「それから、転生させた娘はギルドまで馬車で運んでおいて下さい。」

そういいルーザンマードルの方向を向き、歩き出そうとする美女を引き留める。

「あっ…あの！　さっきはこいつの事…助けて頂いてありがとう御

座いました。」

美女は礼には及びませんよ。といって歩きだす。

「あっ…あの、貴女はルーザンマードルのギルド所属の方ですよね？　話しとか聞かせて貰えませんか？」

更に引き留めた、が

「もし断ったら？」

真顔で放たれたその台詞に俺は、う…　と息詰まる。

「ふふっ…冗談ですよ、貴方はルーザンマードルのギルドに所属するために移動していたのですか？付いてきて下さい。歩きながら話しましょう。」

ふふっ…と笑った美女に、はっ…はい！　と言って俺はユーを抱いたまま弓士団の中に交ざり、ルーザンマードルまでの道、俺は歩きながら、緑髪の彼女と話し始めた。

移動中：「小食マンティコアなお姉さん」と半エロ妄想

「…私の自己紹介は以上です。」

取り合えず名前を聞いてみると、碧色の美女はご丁寧に自己紹介をしてくれた。彼女は、ルーザンマードル所属０２転生小隊隊長。名前は「雲村鳴葉（くもむらなるは）」と言うのだそうだ。　ちなみに趣味はお菓子作りだそう。美人だし、料理も出来る…なんていうか…嫁にとりたい。勿論冗談だ、半分くらいは。

「非常に言いにくいのですが、私はまだ貴方の名前すらまだ聞いていないのですが。」

遠慮など微塵もしていない様子の彼女の台詞。そういえば、俺の方はまだ名前も名乗って無かったな。

「あっ…聞きっぱなしでしたね、すいません。」

許します　と鳴葉さん。

「有難うございます…。俺は」

「にゃあ、シュウにいっていうんだよ～」

いつの間にか、すっかり目を覚ましていたユーが俺の腕の中で楽しそうに笑っていう。ちょっと待て

「いや…俺の名前は」

「成る程、『にぃ』は『兄』の意ですね。では私はシュウさんと呼ぶ事にしましょう。」

遮られた。俺の嫁…じゃなくて鳴葉さんの中で俺の名前はシュウで認識されてしまったようだ。

「はぁ…あの、鳴葉さん。俺の事は呼び捨てで構いませんから。」

「それでは遠慮なく。それではシュウ、あらためて宜しくお願いします。」

なんだろう…なんていうか、「シュウ」がどんどん周りに浸透していく。まぁいいか…

「それよりも、過去に踏み入るようで失礼かもしれませんが、そこの黒いお嬢さん、察するに血の繋がった妹さんでは無いようですが…お二人はどのような関係で？」

「にゃあ、私はシュウにぃにすぐそ…」

下手な事を言われては困る。　「すぐそこで拾われた」と言おうと開いたユーの口に手を被せる。モゴモゴと何かいい、じたばた腕の中で暴れるユー。元幻獣とはいえ１１歳の女の子。１１歳に負ける俺ではない。　暴れるユーを取り押さえたまま

「ユーとは昔色々ありまして、まぁユーは俺の義理の妹みたいなものですよ。」

在り来たりな台詞だったがなんとか誤魔化せた気がするぜ

「その『色々』が聞きたいのですが…まぁいいでしょう。それともう1つ。失礼な話かもしれませんが、その黒いお嬢さんは、半魔ですね。」

「半魔の何がッ…！！」

半魔の何が悪いんだ、そう叫ぼうとする俺を

「シュウにぃ、いいんだよ。　ねぇ、碧のお姉さん。半魔は街には入れないの？　街には住めないことになってるのかな？　もしそうなら私もシュウにぃも街には入らない。　シュウにぃは守ってくれるって誓ってくれたから。」

至って冷静な態度で制止するユー。だが言葉1つ1つに感情を込め、ユーが言う。　鳴葉さんは、俺の大声に、驚きを顔に出したが、すぐにいつもの冷静な顔に戻り、言う。

「先ほどの失礼な質問お許しください。本当に。ルーザンマードルでは勿論半魔の方も入街、移住できますのでご安心を。」

「うん、良かった。碧のお姉さん。」

二人の冷静なやり取りに、俺も我に帰る。

「あ、こちらこそ、取り乱してしまい、みっともない所をお見せして、すいませんでした。」

取り合えず謝る俺、許します、と鳴葉さん。こんなシリアスな場面で「許します」などとと言う鳴葉さん。はぁ…ちょっとばかり調きょ…いや、再教育の必要が…（笑）

くへへ…と妄想を膨らませていると、

「ところで碧のお姉さん、みたところ…っていうか明らかに転生人種だよね？　元々はなんだったの？」

ニヤニヤしている俺を完全にスルーして、いつもの楽しそうな笑顔に戻り、ユーが言う。はぁ、ユーもこのタイミングで転生の話を持ち出すとは…本当に空気の読めない奴ばっかりだな。そんな悪い娘は二人まとめてお仕置きだｎ（ｒｙ

くへへ…とニヤニヤしている俺を見事にスルーして鳴葉さんが答える。

「はぁ…いつかは来ると思ってましたけど、その質問にはあんまり答えたく無いのですよ。」

「うん、そっか。で？」

今日のユーは微塵も容赦が無い。はぁ…とため息をつき、俺の玩具…いや、鳴葉さんが話し始める。

「実は私…マンティコア（ライオンの頭に鷹の爪、猛毒性のあるサソリの尾を持つ境獣）の転生種なんですよね。」

「へ？なんで話したくないんですか？　確かにマンティコアは獰猛なイメージは有りますけど…」

純粋に理由が知りたいので質問する。この話に地雷が潜んで無いことを信じて。

「まぁ私はおしとやかを自負しているので獰猛なイメージが気に入らないというのも有りますけど…それより何と言っても嫌なのはマンティコアの『大喰い』のイメージですよ！　確かに私の群れには一匹で討伐隊をすべと喰い尽くす猛将もいましたけど…私は少食な方だったのに転生した後と言えばマンティコアと聞いただけで大食い大会にチャレンジしてみないか等と話を持ち掛けてくる輩さえ…（中略）」

はぁ…しまった。自分の思いを延々と語るマンティコア鳴葉さん。かなり長くなりそうなので耳を傾けるのもそこそこにして妄想の続きをだな…　くへへ…鳴葉さんにはこれをだな…そんなに赤くならなくても…　この服をきてヨーグルトを口で…（ニヤニヤ）

「…と言うわけなんですよ、酷くないですか？」

話し終えた後、全てを吐き出したようにスッキリとした顔の鳴葉さん。

「えぇ、そうですね、色々苦労されたんですね」

目を反らし生返事をする俺。

「そうだね～　特にマンティコアが転生したって聞いただけで太ってると勘違いしてプロレスのヒール（敵役）にスカウトしにきたプロレス団体がいたってのは酷かったねぇ。」

ユーは最初から最後まで真面目に聞いていたらしい。

「そうなんですよ。（以下略）」

鳴葉さんの熱弁を聞いているうちに、不意に前方が明るくなり、次第にざわざわという音も聞こえる。

「…だからして…っと、もう到着ですか…　さて、着きましたよ。ここがルーザンマードルです。」

話したりなそうな鳴葉さんと弓士団の面々が、俺とユーより先にレンガのアーチをくぐる。鳴葉さんは此方を向き、

「シュウ、黒いお嬢さん、ルーザンマードルにいらっしゃいませです！」

微笑み、小首をかしげ、先ほどまでより大分明るい口調で言う。

ユーが腕からすり抜け、「わぉぅい！」とよく解らない歓声をあげ、駆け出し、アーチをくぐる、それを追いかけるように、俺も小走りでアーチをくぐり、レンガの一軒家の多い街並みの中に一歩、足を踏み入れる。

この一歩から始まる、俺達の街での生活、ギルドでの新たな出合いに胸を膨らませながら。

（P．S．ユーも胸を膨らませていたと思うが、胸の大きさが変わってはいなかったのは言うまでもない。　残念だ…）

到着後：紅竜のお姉さんとのご対面

「では皆さん、早々ギルドに報告に行って、酒場で飲みましょう♪」

鳴葉さんが明るい笑顔で弓師団の面々に向かって、声をかける。

うぉぉぉっ！　と弓師団から歓声が上がる。

「今回は大物を仕留めたのですから、０２小隊の以外にもギルドの中枢や、酒好きな仲間達も結構来るでしょう。これからギルドの仲間入りをするのですから、仲間との顔合わせも兼ねてシュウもご一緒にどうですか？」

俺に向かって微笑みかけて言う。　どうやら鳴葉さんは笑って話しかける時、小首をかしげる癖があるようだ。　ふむ…可愛いじゃないか…　じゃなくて。

今は街の外での厳格な様子は窺えず、寧ろはたから見れば明るいムードメーカーのような存在にも見える。

「すいません、あの、大した質問じゃなんですけど…　鳴葉さんの様子が街の外と大分違うような気がするんですけど、いつもあんな感じなんですか？」

うぉぉぉぉっ！と声を上げている弓師のうちの一人、背の高い男に聞いてみたところ。

「そりゃあ、鳴葉ねぇは街ん中じゃあんな感じだよ。街の外じゃあ何があるか解らんからなぁ」

とのこと。素直に笑ってれば最高に可愛いんだから弓師なんて辞めて俺の嫁になればいいん…いや、でもギャップがあってこれはこれでイイな…これがギャップ萌えというやつか！（違うか）

「行きますよね？」

俺を急かす鳴葉さん。

自分をジラす俺に、早く入れてと俺を急かす…じゃなくて、返答を急かす。

「俺は勿論いいですけど、ユーはまだ未成年なんですけど飲み屋とか行って大丈夫なんですかね？」

一応了解の返答のついでに街に入ってからひとしきり騒いだあとパタンと寝てしまった、俺の腕の中にいるユーを指差し一応質問。

「大丈夫ですよ。飲酒はダメですが、一応ジュースとかもありますし。うちの技術屋（メカニック）も１２歳ですけど普通に来てますし。でもあの娘は普通にお酒飲むので妹さんが真似しないよう気をつけてくださいね？」

成る程、一応ユーも連れて行けそうだな。

「解りました。因みに何時頃から打ち上げなのですか？」

因みに今は午前2時だ。今日の午後8時くらいからだろうか？

「今日の今から夜明けまでです。」

「え、でも俺今まで歩いてきて疲れ」

「では行きましょう。こちらです、付いてきてください。」

鳴葉さんは、話しを一方的に打ちきり、弓師団の面々に向かって「皆さんは先に酒場に行っててください。」といい歩きだす。困ったなぁ…　と思ったところだが、小走りに追いかける。鳴葉さんには今後も振り回されそうだなぁ。あとユーにも。

深夜だからか、余り人がいない（灯りのついている家は何軒かあった。さっきの弓師団の方々の「うぉぉぉっ！」は近所迷惑にはならなかったのだろうか？）街路を暫く歩くと、窓から電球の光が盛れている大きなレンガ建ての入り口の大きい建物の前に着いた。

「酒場ってここですか？　随分お洒落っていうか、イメージと違いますね。」

正直な感想を述べる。

「違いますよ。ここはギルドです。それに酒場はもっと賑やかですよ。ふふっ…期待してて下さいね♪」

と開いた木製の門をくぐりながら鳴葉さん。成る程、と相づちを打ちながら門をくぐる俺。

綺麗に磨かれた大理石の床に踏み入れた2～3秒後…

「あっ！　鳴葉？おっかえりーっ！」

明るい声が広い室内に響く。はぁ、とため息をつき「帰ったわ」と

鳴葉さん。

「一応報告するから、ちゃんと記録しなさいよ？」

ロビーの方に歩きながら鳴葉さんが言う。

「はいはい～、まぁ鳴葉が無事に帰ってきたんだから成功なんだろーけどね。りょーかいだよ～♪」

明るい声の出所には、ルーザンマードルのマネージャーの制服らしき服（黒地に赤の端麗なデザイン）を着た、深紅の髪を長く伸ばし、深紅の翼を持った、何て言うか…胸の豊満な、肌以外が全体的に真っ赤な女性が、満面の笑みでこちらに手を振っていた。

目を開けたまま唾を飲み、立ち止まる俺。これが噂のギルドマネージャーか…すごい破壊力だ…（ゴクリ）

立ち止ったままの俺を置き去りにして受付まで歩く鳴葉さん。

「第０２転生小隊、ボーティスの転生を完了し、無事帰還です…っと、空音あんた、こないだ『鳴葉任務成功だよ～っ』って報告書にかいてマスターに怒られたばっかりでしょ？　今日はちゃんと書きなさいよ。」

と鳴葉さん。ほいほーい、と紅龍のお姉さん。鳴葉さんと俺との会話がいかに他人行儀だったかが解る会話。　くふっ…泣けるぜ…

静かに干渉していると

「およっ？そこにいるお兄さんはどちら様かな～？　お名前は？」

紅龍のお姉さんからお呼びがかかる。　今、ユーは寝ている。俺の正しい名前を可愛いお姉さんに覚えて貰うチャンスだ！

「あっ、俺ですか？俺は」

「シュウよ。」

うぉぉいっ…また邪魔が…だが俺は諦めないぜ！

「ちょ…鳴葉さん！　いや、俺の名前は」

「ふぇ～、シュウっていうんだぁ、私は唐草空音（からくさそらね）だよ。宜しく～♪」

この人もか…　紅龍のお姉さん改め、空音さんの中で俺の名前はシュウで認識されてしまったらしい。くそぅ。

「シュウはギルドに所属するらしいの。この後いつもんとこで酒盛りするとき、シュウも来るからあんたも来なさいよ。」

と鳴葉さん。　ほよー　とよく解らない声をだして

「じゃあ自己紹介はあとでだね～。皆にも伝えとくね～♪」

という空音さん。気の効くお姉さんだな、とか思ってる俺に

「さぁ、行こ…　あ、すいません、行きましょう。」

と鳴葉さん。鳴葉さんが空音さんに話しかける口調のまま言いかけて、訂正する。早く堅苦しい他人行儀から開放されればいいなぁな

どと思っていた俺には好都合だ。

「謝んなくてもいいですよ。なんか敬語とか使われると話しづらいんで。タメ口でお願いします。」

すると少し驚いた顔をして鳴葉さんは

「そ、そうですか？…では遠慮なく…　改めて宜しく、シュ…シュウ…」

慣れない様子二度目の挨拶をしたあと、「な、なんか変じゃない…？」と鳴葉さん。

空音さんと話すときみたいでいいんだけどなぁ…　でも、慣れない様子が初々しく目に写る。　可愛いなぁ…

「じゃ、じゃあ行きましょ。付いてきて。」

と相変わらず慣れない様子の鳴葉さん。

じゃーまた後でねーっ　と手を振る空音さん。

ギルドを出て、先を歩く鳴葉さんの後ろ、酒場までの道を歩く俺の思う事は１つ。

今度こそ俺の正確な本名を覚えて貰う事だけだ！

酒場にて：俺が出会った男は大胆なロリコンだった

「うっわーっ　にゃぁ、シュウにぃ～　すっごい賑やかだね～」

「うわ…よくぞこの短時間で…凄いですね、鳴葉さん」

「ふ、ふふん、これくらいいつもの事よ…♪」

上から順に

移動中にすっかり目を覚ました、初めての「酒場」にワクワクテカテカな「ユー」

正直色々びっくりな「俺」

俺へのタメ口に慣れない様子だが、地味に誇らしげな「鳴葉さん」

ユーはまだ子供だからか、単に「酒場」の賑やかさに驚いているようだったが、俺は単に騒がしいのに驚いているわけではない。

俺とユーが鳴葉さんに案内された場所は、「さっきまでいた公園」だった。

赤レンガで出来た、アーチ型の入り口や、白濁色のブロック（長方形に切り出された石）で囲まれ、同じ素材で出来た噴水などから、辛うじて「さっきまでいた公園」と解った

だが、「現在俺がいる公園」はさっきまでの静かな様子とは一変して、所々に設置された１００Ｗの明るい電球、酒樽が積まれ、その

周りでは、弓士服や鎧、ローブなど、多種多様な服装の転生人種、通常人種、入り交じって、背もたれのある木製の椅子に座り、何個かある、頑丈そうなガッチリした木製の机を囲んで楽しそうに話しながら、ガラスのジョッキに入ったビールを飲んでいる、そんな光景が広がっていた。

「さぁ、行こうよ。」

と良い俺の手を引き（ユーも「待ってよ～」といいながらぴょこぴょこ付いてきた）、小走りに1つのテーブルまで行って、空いている椅子にカタンと音をたてて座り、「シュウも妹さんもどうぞ」と右横の空き椅子を勧めてくれた。

「じゃあ失礼します。」と知らない人ばかりに囲まれている机の前の椅子に座り、なんか肩身狭いなぁなんて思ったのもつかの間

「っよーう！　鳴葉！　今日はボーティスの転生成功したんだってなぁ？　すげーじゃねぇかぁ！」

響き渡るような声が耳に入る。声の主の方を見る、声の主はオレンジ色の目をした同い年くらいの通常人種の男だった。

「クルヤ、いくら防音結界が張ってあるからといって騒ぎすぎよ。」

と鳴葉さん。　声の主に言う。　すると「クルヤ」と呼ばれた人物はポリポリと頭をかき

「いや～すまんすまん（笑）　おっ？　その隣に居るお兄さんは鳴葉の彼氏かな！？　ひゅう！」

などと言い出した。なっ…と言い、一瞬赤くなった、鳴葉さんの顔が険しくなり、殺気が吹き出す。

「まっ、待て！　冗談だ！　話せば解る！　わっ…　まずはそのサソリの尾をしまってくれ！」

本気で慌てる「クルヤ」流石に酒場で死人がでるのは和やかじゃないな…

「なっ、鳴葉さん！　まずは落ち着いて！　深呼吸ですよ！　ひ、ひ、ふー…じゃなくて、スイマセンマジでスイマセン！！」

とりあえず止めたがちょっとしたミスから、俺の命まで危なそうだ。死を覚悟する。だが、鳴葉さんはクスッと笑い、殺気もおさまる。

「ふぅ～　助かったぜ、ありがとな兄ちゃん、俺はクルヤ、クルヤ＝マーティクシィスっーもんだ。」

「全くクルヤ…冗談も程々にしなさい」とブツブツ言う鳴葉さんをスルーしていう。　全く…危ないところだったぜ…　取り合えず挨拶…っと、これってもしかして俺の本名覚えてもらえるチャンスじゃないか…！？

「あっ、俺は」

「あー解ってる解ってる、明日からうちのギルドに入るシュウだろ？　空音さんから聞いたよ（笑）」

うぉぉぉぅ…！！　空音さんがどうやらギルドの仲間内には伝えて

しまったらしい。ギルドの面々には俺の名前を覚えてもらうのは絶望的だ…

「はぁ…宜しくお願いします…」

ちょっと落ち込む…

「おうおう、俺にはタメで良いって！　敬語とか使われると…っておぉぅ！？」

俺にタメ口の許可をだした後、椅子にちょこんと座り、ジョッキでコクコクとオレンジジュースを飲むユーを見て、声をあげるクルヤ。

暫く固まったのち、ハァハァと息を荒げる。そのあと、ユーに「ねぇお嬢ちゃん」と声をかけ、んんっ？と返事が帰ってきた後、クルヤの発した言葉は

「ハァハァ…　お嬢ちゃん…どんなぱんつはいてるの？…ハァハァ」

だった、「ふぇ、私今日は」まで言ったユーの口を塞ぎ、「俺の妹になに聞いてんだっ」とクルヤに言う。

「まぁそう固いことというなってぇ。」

と言い、ユーのワンピースを捲ろうとするクルヤ。咄嗟にでる俺の右足。　クルヤの左足の太ももにヒット。足を払われ、地面に頭を軽く打ち、鼻血をだして気絶するまえに彼が言った最後の台詞は

「はいてない…！！　お嬢ちゃんのあそこを見れただけで俺は…一生の悔いなしだぜ…」

だった。クルヤの鼻血は地面に頭を打った衝撃じゃないのかもしれない…

というわけで今話の締めの一句

『ロリコンや　嗚呼ロリコンや　ロリコンや』ｂｙシュウ

酒場にて：純白マシンと機械娘の話

「ふ～　麦１００％（ホップ）のビール、久しぶりに飲みましたよ～　やっぱり美味しいですね。」

大分酒場の雰囲気にも慣れてきて、ユーは楽しそうに笑いながら、周りの人達と話してる、俺もそろそろほろ酔いだな、楽しく酒を飲んでいると

ダッダッダッダッ！　ガッ！　ズザァ、プシュゥ…

大きな音を立て、レンガの街には似合わない、純白の足の長い、全長５～６ｍ位の、近未来的な人型のマシンが酒場に駆け込み、止まった。純白のマシンの見た目からは想像も出来ない元気な女の子響くような声が聞こえる。

「ふぅ～間に合ったぁ　あ、やっほー、鳴葉ねぇ！　んん？このここらで見ない顔の人達が明日からうちに入るって言う、シュウとユーちゃん？　よろしく～」

挨拶された。　しかもシュウって…もう伝わってるし…ていうかユーの名前って空音さんに教えたっけ？

「にゃぁっ…　かっ…　カッコいいんだよ！　よろしくなんだよ～」

目をキラキラさせて、マシンに挨拶するユー　好奇心丸出しの女の子って可愛いよなぁ…

ていうか、「うち」？こいつもギルドのメンバーなのか？

「鳴葉さん？　ルーザンマードルのギルドには転生人種と通常人種以外にも機械までいるんですか。すごいですね。」

「ええ、彼女はうちに一人しかいない貴重な『技術者（メカニック）』よ。」

…え？　「一人しかいない技術者」…？　たしかこないだ「技術者は１２歳だ」とか言っていたような。

「え、メカニックって１２歳の『人間』じゃないんですか？」

という俺の質問に、返答の代わりにに鳴葉さんは人工生命体（仮）に向かっていう。

「アルエ、いつまでも入ってないで出てきなさい。」

はいはい～と言い、マシンがガションと音をたて、片膝をつく。

「いや～、入ったままじゃ酒も飲めないもんね～」

プシュゥと音をたてて、後ろに縮まるように伸びた頭部がゆっくりと上に開く。

よっと　と言ってぴょんとコックピットから出てきたのは、明らかに季節外れの（因みに今は１２月だ）灰色のタンクトップにハーフパンツ、その上に白衣一枚という服装の、薄灰色のショートカットヘアーの上にゴーグルを付けた、いたずらそうな顔の少女だった。

顔にはススが少しついているものの、充分肌の色が白い事が分かる。

「やっほー、シュウ、ユーちゃん、初めましてだね、此方(こちら)アルエ＝ルディアヴァルト、宜しくぅ！」

と左手を腰に当て、右手で敬礼をした後、ピッと指を少し前に動かし、にひっと笑うやいなや、身震いをして、「うへっ…寒ぅ、やっぱりボク着替えてくるね」といってコックピットに戻ってしまった。

「鳴葉さん、このマシン、あの娘が自分で作ったんですか？」

まぁ買ったんだろうけどな、もしそうだったらびっくりだ。

「はいそうです。」

マジで！？

「組み立ては勿論ですが、設計図の製作もアルエです。因みに部品は町工場から特注で作って貰ってます」

マジかよ…天才技術者ちゃんじゃねぇかよ…　などと話していると

「ちょっ！？　ユーちゃん？　なんでコックピットに入ってんの！？」

噂の天才技術者アルエちゃんの声が聞こえる。

「えへへ～、にゃぁ♪　お着替え中失礼します～」

マシンからユーのいつもの能天気な声…　いつのまに乗り込んだんだ…

「ちょっ！？　どこさわってんの！！　ダメだよぉ！！」

「ほよほよ、ユーのよりふにふにしてるのです～」

アルエの叫び声　こんなやり取り、中で何が…ちょっと気になるぜ…

突如コックピットがパカッと空き、ユーが転がり出てきて、しりもちをつき、「えへへ、怒られちゃった」と笑いながら一言。

立て続けに上半身裸で頬を染め、胸を右腕で隠しているのアルエがコックピットから顔を覗かせ一言

「シュッ…シュウ！　その娘危険だよぉ！　ちゃんと押さえててっ！」

そう言いコックピットの蓋を掴んでバタンと閉めた。

すまんアルエちゃん…ユーは悪気があった訳じゃないんだ、ただ天然なだけなんだ、許してくれ。

マシンから

「シュッ…シュウ！　ちゃんと押さえててよ？　中からメインカメラの映像でちゃんと見えてるんだからね！　ちゃんと押さえてないと、サイククロティクス０２の２５５ｍｍキャノン砲で酒場ごと爆破するからねっ！」

とアルエちゃんの脅し声が聞こえたので（酒場で飲んでいる人は気にせず楽しそうにしていた）、さすがにユーも大人しくしていたが、一応ユーを膝の上に乗せて押さえておく。

暫くすると、コックピットがゆっくりと開き、巫女服のような配色の袖口の広い、羽衣の様な服に、同じ配色のミニスカートに白のハイニーソという、上半身だけ中々温かそうな格好で、アルエちゃんが出てきて

「ぅ〜　さっきはよくもボクの胸を揉んだねっ　いつか仕返ししちゃうからねっ」

と一言、第一声がそれですか…　ていうか胸揉んだって…　まさかユーにはGL（ガールズラヴ）の才能が…いやいや、ユーからは大きくなったら「お兄ちゃん、私…初めての相手は…お兄ちゃんがいいな…♪」と言ってもらわねばならんのだからそんなことでは困る、いや、そんなハズは無い！（キリッ）

くふふ…と妄想を広げていると、鳴葉さんが「おや」と言い、

「アルエ、それは神聖な場ででのみ着るはずの、グレムリンの正装では？」

と続けた。　ん…？　アルエちゃんは通常人種に見えたのだが…

「ん？そーだよ。　だって酒盛りって充分神聖じゃん？」

と愉快そうに、アルエちゃん。はぁ…と呆れたように溜め息をつく鳴葉さん。

「ねぇ、アルエちゃんって転生人種だったの？」

と気になったので、つい質問。一瞬アルエちゃんの表情が変わった

ので、地雷を踏んだかと焦ったが、怒鳴り声の変わりに彼女の口からでたのは

「そうだよ！　ボクは元々機械の民、グレムリンの族長の娘だったんだよ～　えへん。」

と自信満々に返答。「機械の民と言っても機械に悪戯してただけでしょう。」とちょっと酔っ払い、毒づく鳴葉さん。「そんな事いうと技術者辞めちゃうぞっ」とちょっと怒ったアルエちゃん。

「まぁまぁ、そんな碧のお姉さんも機械のお姉さんもケンカしないで、今日は皆で楽しむんじゃなかったの？」

ユーの発言に一瞬ぽかんと場は静まり、そのあとドッと笑いが起きる。

「こんなのいつものことだよ！（笑）」　「キャハハハ、お嬢ちゃん！　可愛いじゃねえか（笑）」　色々な人が口々に言う。

笑いの中でアルエちゃんが椅子の上に立ち、笑顔で声を張り上げて言う。

「アルエ＝ルディアヴァルト１２歳！！　今日は朝まで飲み明かしまぁす！！　皆さんお付き合い下さいッ！！」

イェェェッ！！　と起こる歓声、その後、鳴葉さんが立ち上がり、グラスを高く持ち上げ、声をあげる。

「神よ！　今日もこうして幸せを頂けた事を感謝します！　乾杯っ！！」

かんぱーいっ！！と声が上がる。俺もユーも「乾杯！！」と叫ぶ。
さぁ、今宵の宴は始まったばかりだぜ

酒場にて：鳴葉さんと死神少年の因縁関係

確か、泥酔すると幻覚見えるようになるらしいな…幽霊が見えるとは、そろそろキツいか…

「ギョ…いや、ゴーストよ」

と、酔って頬の火照った鳴葉さんが言う。ろれつが回っていない。今連れ込めば鳴葉さんと、あんなことやこんなことが出来るよなぁ…　いやいや、イカンイカン　って…ゴーストぉ？

「は？　ルーザンマードルにはゴーストなんて平気で居るんですか？　怖…」

それって普段から魂の抜き取りとか頻繁に起きてるって事なのかなぁ…　以外と物騒じゃねぇか。

「ほう？　鳴葉。コイツは男の癖にゴーストが怖いのか？　情けない男だな」

横を向いて話していた俺の横、テーブルのほうからムカつく台詞が飛んできた。　右を向くと、嘲るような冷笑を浮かべた、「少年」がリンゴをかじっていた。黒っぽいドクロのレリーフのついた、深緑のフードを被って…って、そんなことより、今はこのガキに馬鹿にされた事が非常に遺憾だ。

「お前っ！　今俺の事ガキだと思ったろ！　これでも俺は１億７２００万歳でお前より歳上なんだぞっ　多分！」

１億７２００万歳だと？　俺より１億７１９９万９９７６歳上…
このガキが？　不思議に思っていると、鳴葉さんが種明かしをしてくれた。

「死神年齢１億７２００万歳、だけどね。人間年齢にすれば１３歳ってとこかな？　よちよち（笑）」

「なっ…鳴葉ぁ！」と顔を赤くして、怒る少年。　…って、死神年齢？　死神…　こいつ死神なのか？　じゃあなんで俺から見えるんだよ。　この疑問は少年がかってに解決してくれた。

「もっ…もとわと言えば俺が死神界から追放されて、冥門（冥界に続く門）を探してたときにお前が転生魔方をかけたんだろっ！」

と死神少年。　なるほど…　いや、なるほどじゃねぇけど。

続いて「いやいや、規則を守らなかったお前の自己責任じゃないか。」と鳴葉さん。死神が怖くないんですか？　っていうか、規則ってなんだよ。

「んっ！　今お前規則って何って思ったろ！　よくぞ疑問を持ってくれた！」

うぉっ…　死神少年の顔が急にパアァッと明るくなる。

「あぁ、折角だから…ってお前、あれか？あの、読心術ってやつか？　すげーな」

「おぉ、聞いてくれるのか？　だけどな、その『お前』って呼び方やめてくれるか？あと『死神少年』も、俺はリリーム＝バルシェン

ド、呼び方は、リリーでもバルさんでもリリムでも名前が入ってりゃなんでもいい。」

成る程…読心術、名前、死神だというのは本当らしい。　たしか『バル　～　ド』は死神につけられる名前だったはず。　とりあえず俺は「シェンド」と呼ぶことにしよう。

「シェンドか、いい呼び方を考えてくれた。　前だと名乗ってみれば『リリシェ』や『バルたん』などナンセンスな呼び方ばかりだった時期もあったからな…ブツブツ…」

鳴葉さんを横目で睨み、なにやらトラウマを話し始めるシェンド、ていうか心内が読まれてるって落ち着かねぇな…　まぁ、とりあえず話をもどす。

「ま、まぁ、色々苦労したんだな…で、なんで追放されたんだ？」

そうだったな、といってシェンドが話し始める。

「まぁ簡潔に話せば、コイツの寿命を伸ばした。」

フッとシェンドの横に突然現れたゴーストを指差し、言う。

「ハァ？…って、うおっ！？」

ビビったぁ…ていうか死神は死んだ人間を冥界に連れてくのが仕事だろ？　寿命を伸ばすなんてできるのか？

「出来るんだよ。まぁ元々は人間の寿命を縮めるための術なんだけどな。　コイツ、今は俺のブラザーなんだけどさ、昔、住職やって

てさ、なんか、結婚相手が事故って死んだんだけどさ。その次の日コイツも死ぬ予定だったんだよ　んで、まぁその前から気に入ってたんだけどよ。　可哀想で、せめて彼女弔ってやれるよう、つい伸ばしちまった。そんで、原初神（カオス）のおっさんから見つかって追放だよ。　だから自力で帰ってやろうって、冥門探してたら、鳴葉に転生喰らったんだよ。　んで、元々魔力つえーんだからってギルド入れってよ。　マジコイツ死んだら地獄だわ。　寧ろ死ねバーカッ！」

と最後に暴言を吐いて終わりのシェンドの話、成る程…中々胸をつくいい話じゃないかっ…　ていうか死神って転生できたんだ。

いい話と思ったんだが、気が立ったシェンドは「シャアーッ」と言い、隣のゴーストに「殺るぞブラザー！！」と言い、空中に飛び出し、くるりと回ったと思いったら、地面に足が着いた頃には、白い大鎌を握っていた。　まぁ、なんにせよ暴力はよくないよなぁ。

「鳴葉！　覚悟しろ！」と言って地面を蹴り、鎌を振りかざし、襲いかかる。（『襲いかかる』は勿論、鳴葉さんを押し倒した訳でも、鎌を使ったＳＭプレイの事でもない）　目を閉じてビールを飲んでいた鳴葉さんは「ん？」と横目使いでシェンドを見る。振りかざされた鎌を椅子から転がるように避け、ほうきに股がるように鎌の上に乗り、後ろに引くように鎌を奪って肩にのせ、「まだリリシェに私は早いなあ、もうちょっと大きくなってからね（笑）」と妖しく笑みを浮かべ、一言。鳴葉さんって酒飲むとエロくなるんだなぁ…という、知識をまた一つ得た。っていうかさっきの『リリシェ』って鳴葉さんの命名だったんだ…

ちいぃッと『白鎌（ブラザー）』をゴーストに戻し、悔しがり、「親父！　酒だ！」と俺に言う。

しょうがないので、ビールを酒樽から持ってきて、渡すと、シェンドは俺から奪い取るようにビールをとり、一気に飲み干した。シェンドが、余韻で伏せていた顔を上げると、顔は真っ赤で、目もとろんとしていた。　…コイツ酒に弱いのか…

子供の死神が酒盛りに加わって、俺達の夜は更に盛り上がっていく。

鳴葉宅：乱心「姉」乱心「姫」

『雇用法』では、主人と契約を交わした家令（よーするにメイドさん）は肉体関係にあってはならない、と記してあるらしい。

…なんでこんな話をしたかと言うと、鳴葉さんと空音さんが可愛すぎるからだ。　いや失礼、理由になってなかったな。

まぁ簡単に説明すると、あの後、空音さんが「今日は飲まないから…」と言って、メイド服で酒場に来て、ウェイトレスをしてくれている。

そして酔ってすっかりキャラが崩壊した鳴葉さんが、「私もっ」と言って、やけにスカートの短いメイド服にその場で生着替えをしはじめた。

俺はなんとか耐えきったが、男性連のうち何人かは鼻血を吹いて気絶してしまった。　まぁ俺も鼻血は見事に吹いたが。　鼻血を吹かなかったのは多分シェンド位だろう。

まぁなんていうか、二人のメイドさんから数人が殺害された訳だが…って、さっき『雇用法』について話したが、鳴葉さんも空音さんもメイド服着てるだけで俺の家令じゃなくね？　っていうことは襲っても…　くふふ…

なんて、ニヤニヤしていると

「シュウ…？　なにかよからぬ事を考えてるな？　えい…っ」

顔は見えないが、ひどく妖艶な鳴葉さんの声と共に、べろりと温かいモノが首を這う。

これは…と、横目にその生暖かい、真っ赤なモノが、赤く火照った鳴葉さんの、口からべろりと出ている事を確認した俺は、鼻血を吹き出し、

遂に貧血で倒れた。

――――――――――――――――

「…此処は？」

まだ頭が痛い…

取り合えず周りを見渡す。俺の横たわる白いベッド、白いカーテン、木の丸イスが一つ、晴れ空と雪の積もった木の写る窓が二枚。一晩で積もったんだな。他にあるのは…　コクコクと首を垂れて眠っているユーくらいか。

…起こすべきかな？

気持ち良さそうに眠っている女の子を無理矢理起こすのは気が引けるけど…

「おい、ユー？　起きろってば」

起きない。　ん～

ツンツン

ほっぺを突っついてみた。　柔らかくて気持ちいいな…　ツンツン…

起きない。

しょうがない…　しょうがないから別の場所をツンツンしてみるか…　くふふ…例えばこの平らな胸とか…　スカートの下の…　くふふ…　では早速…

「んんっ…　ん～？」

スカートの下に指を伸ばしたところで、ユーが起きてしまった。

固まる俺。

「わっ…　シュ…シュウにぃ？　にゃ…なにしてるの…？　手…私の…」

バレた。

「いやっ…これは…」

弁解のしようがない。

「シュウにぃ…　にゃぁ…私と…エ…エッチなことしたいの…？」

姫はご乱心か。

「いいよ」

いやマズイだろ

「ベッドもあるし…」

ワンピースを肩から外し始めるユー　マズイだろ　いや、でも…
いやいや、やっぱりダメだ！

「と、ところで！誰がここまで運んでくれたんだ？」

話を反らす方向でいくぞっ

「あっ、うん、空音さんだよ～、まぁ酔っぱらって無かったの空音さんだけだったからにゃぁ」

無事成功。　ユーがバカでよかった。

「そーいえば鳴葉さんからも伝言貰ってたんだ、えっとねー、『こんどは吐くまで飲ませる』…がんばれ～　がんばれ～」

ワンピースを肩に戻しながら複雑な、苦笑いの表情を浮かべるユー
　鳴呼、鳴葉さん酒が回ると凄いからな…　生きて帰れるか心配だぜ

「わ、わかった…わかったぜ畜生…　ところでお前昨日まで『碧のお姉さん』とか『紅いお姉さん』とかだったのにいつ名前覚えたんだ？」

「さっき」

…あっさりしてんなぁ…まぁいいや。

「シュ…シュウ！　昨日はなにやら不祥事をしてしまった様ですま

なかった。　私は酒が回ると己を忘れるのでな…　実にすまなかった。」

バンッと勢いよくドアが開き、声が聞こえる。

そこにはダッフルコートを着た鳴葉さんと、笑顔でこちらを見ているいつもの服の上にポンチョを羽織った空音さんがいた。

まぁ鼻血を出して倒れたのは遺憾だったが…　あれはあれで貴重な体験をさせて頂いた。

「はぁ…別にいいですよ。いや、それよりも、俺は服もってきてるんでいいんですけど、ユーに買い物連れてってやってくれませんか？」

「いいわよ。と言いたいところだけど、私と空音は明後日の重大な依頼の処理があるので急がなければいけませんので…」

え～、むぅ　とユー　まぁしょうがないか…

「なら仕方ないですね。」

「まぁまぁ、ユーちゃんの服は空音の貸してあげるから～。あ、ちなみに明後日の依頼にはシュウとユーちゃんにも参加してもらうから～。」

と空音さん。　って…マジで？

「うへ…マジですか？　俺まだギルドの登録してないんですけど…　それにユーに空音さんの服って…　やっぱりいいです。」

だって萌えるじゃん？　ちっちゃい娘にぶかぶかのTシャツ一枚。
　ぐふふ…
「登録は空音がしといたから～」
と空音さん。　って…勝手にかよ。
「え、そんな勝手に」
「じゃあ時間だからいくわね。また後程、あとで迎えに来るわ。」
また話を遮って部屋を出ていく鳴葉さん。
「さ、ユーちゃん、着替えいこっか～　あ、シャツまたあとで～」
ユーと手を繋いで部屋を出ていく空音さん
ガチャン
「はぁ…　俺一人かよ。」
しょうがない…もう一回寝るか…
寂しさが身に染みるなか…俺は眠りについた

クリスマス・イヴ：聖夜祭・生命樹の護衛依頼にて

「明日はクリスマスだけど～　皆さんにはもれなくお仕事があるから～♪」

１２月２３日　朝っぱらから、ギルドのロビーに連れてこられ、すっかり萎えている俺と、集められた、広いロビーの椅子にバラバラに座っている、同じく萎えた仲間たちに笑顔の空音さんから声がかかる。

はあぁ？　と盛大に上がる不満の声。

「今回の依頼は、『生命樹』を悪魔から護衛することよ。」

いつもどうり、酒の回っていない鳴葉さんは冷静だ。

『生命樹』なんか元々『聖守（せいしゅ）』から守られてんじゃねーか！　と異口同音、大いに不満の声。

因みに俺はよく知らないのだが、『聖守』とは、なんか、悪魔の侵攻から逃れられた、数少ない『生命樹』が魔力を絞って作った結界のことらしい。

「じゃあ、詳しい依頼内容を読み上げるわよ。

『ｔｏ　ベルリディング地方最大勢力ギルド　ルーザンマードル市部さまへ。

今年のクリスマスは、７５０年に一度の【エデン】確立の年ですね。　ベルリディング地方には、【エデン】に植えられた、【生命樹】のうち一本、【ティファレト】が仮住しています。　今年の

【エデン】確立では、【生命樹】の聖心の一部が精霊として具現化する様子です。　具現化するまでの【聖心合成】の間、一時的に【聖守】の力が弱くなるので、【ティファレト】にできた、【禁断の木の実】の魔力に呼び寄せられた悪魔、魔物から【ティファレト】を守って下さい。

　　ｂｙエデン管理人　アリス』

以上です。　気を引き締めて望むように。」

「折角、聖夜祭あるのに」

「弟が風邪をひいて…」

「ブラザーが風邪をひいて…」

「まだ２５５ミリ主砲のメンテナンスが…」

「聖夜は黒いお嬢ちゃんと一緒に…」

思い思いにブーブー不満を言う面々を気にも止めずに言う鳴葉さん。

俺まだ仕事一回もしたことないのに初っぱなから悪魔とか…マジかよ…最初はキノコ採りとかでいいんだけどなぁ…

背伸びをして、依頼状を覗き込み「んっ？」となにかに気付いた様子の「空音さんのポンチョを着ているため、手を広げるとモモンガのようにも見える『ユー』」が口を開く。

「にゃぁ、この下にちっちゃく書いてある『精霊化した【生命樹】からのお礼の【聖夜の贈り物（クリスマスプレゼント）】が恒例となっております（非読）』って…って、にゃ…　こ、これ読み上げちゃいけないやつかな…？ゴメン、聞かなかった事にしてっ！」

贈り物（プレゼント）という単語が上がった瞬間　「うおぉぉぉっ！！」と歓声が上がる。

ていうかなんでユーが幹部の列に混ざって喋ってんだ。　しかもなんで誰もツッコまねーんだ

「はぁ…　ユー、これはメンバーの集中力保持のための機密事項でしょう…　皆！　今のことは周りには話しちゃ駄目だからね！」

溜め息混じりにあきれ声で呼び掛ける鳴葉さん。

もちろん歓声は止まらない

「盛り上がってるところで重大な連絡事項が一つあるわ」

鳴葉さんの呼び掛けに「ざわっ」と一瞬場が静まる。

重大な連絡事項…　なんだろ？　ゴクリ…

「今回の依頼は人員確保のため、はぁ…　空音も戦闘に参加するわ
皆生きて帰るように」

へ？　空音さんってギルドマネージャーじゃないの？

うぉぉぉおっ！！　とさっきよりも大きな歓声が上がり

「非道竜王空音復活か！？　マジかよ！」

「今回はどんな技見せてくれんだぁっ！？」

「ひゃっほぅ！！　楽しみだねぇ！！　今回もキメてくれよ？」

「聖夜は空音さんと一緒だっ！！」

歓声の中で集まったメンバーが口々に言う。

はぁ…と溜め息をつく鳴葉さん。　「空音だっていつも非道なわけじゃないよ～　フフフッ」と目だけが妖しく笑った空音さん。　怖…

「まぁいいわ…　依頼期間は明日の午前０時から午後９時までよ。もう一度言う。気を引き締めて望むように」

うぉぉぉおっ！！　上がる歓声

俺のルーザンマードルにきて最初の『聖夜（クリスマス）』は、７５０年に一度の特別な『精霊の聖夜（クリスマス）』だった。

さて、俺の初仕事、対するのは悪魔だ

気を引き締めていこう！

クリスマス：生命樹の屋下にて

「うわ…でっか…　これが生命樹ですか…」

愛用の小型ナイフに、鳴葉さんから「洗礼だ」と渡された小型銃を持った俺の前には、木々が立ち並ぶ森の中心部、周りの木々に紛れて佇む深緑の葉を広げ、所々に、うっすら光る、豊満に成長した木の実の実る、雪の積もった木があった。

まぁなんというか…紛れてといっても周りにあるのは葉の落ちた木ばかり、普段は保護色になるだろう深緑の葉も、雪の積もった今では逆に目立つ。

全然紛れられてない…寧ろ目立っているという、なんともアホらしい木なのだが。

「さて、依頼までの時間は…後１０分もないですね。」

生命樹が精霊化を始めるのはクリスマス（１２月２５日）の午前０時からしい。

結界の弱まるその間、禁断の果実を、悪魔や境獣から守らなければいけない。

「さて、皆、戦闘配備に着きなさい。」

ローブ姿に先に珠の着いたデフォルトな魔法使いや、巨大なハンマーを持つ重戦士、自分の身の丈程の剣、小刀のような剣、様々な剣もつ剣士たち。

あげくには死神やマシンナーズ、ロリコンまでいるのだから悪魔の軍勢相手にもそうそう負けないだろう。

死神？　そう言えば…

「なぁシェイド、お前死神なんだろ？悪魔とか友達じゃねーのかよ。」

「ふざけるな、悪魔は下界の住民だろう。死神は神だ、天界の住民だぞ？一緒にするなクズが。」

さいですか…　真面目に怒られてしまった。

「おっ、にゃぁ、北西から紫色のコウモリ羽のデフォルト悪魔発見だよ～」

ユーの緊張感の無い声が生命樹の上から聞こえる。

どうやら畏れ多くも生命樹の上に登ったらしい。

「ユー、数はいかほどか？」

鳴葉さんの声、

「ん～よく見えないけど～、５０くら…　あ…全滅したみたい…」

ちょっと引き気味のユーの声　怯えているようにも聞こえる…って、全滅！？

「全滅！？…ユー？なにがあったのですか？」

５０体の悪魔を一掃って…

「ぁー…　えっとね～　森が爆発したの。上の方には紅いドラゴン。」

あっちゃあ…と鳴葉さん。　なにがあったんだ…

「マイスィル（水系呪文マイスの第三段階）を使えるものは今すぐ消火に向かいなさい。私もカラクリム（魔法を無効化する呪文）で空音を連れ戻しにいくわ。」

成る程…　邪道竜王空音…　どうやら森ごと悪魔を焼き払ったのは紅竜に化けた空音さんらしい。　森を燃やすとは…なんというか…

数メートル先に見える、森の燃える光りが消えた。どうやら消火に成功したらしい。

ほぼ同時に、空を旋回していた空音さん（紅いドラゴン）が空中でバタバタ動いて、墜落していく。

よく見えないが、翼に棒のような物が刺さっていた。　あらかた察するに魔法矢だろう。　鳴葉さん…射ったんだな。

ズドーンという大きな音が聞こえた後、暫く場が凍り付く。

２０秒もすると

「もー　痛いじゃん！　むー…射つこと無いじゃん～、友達でしょ

ー！」

とちょっと怒った様子の明るい声。空音さんの声だな。

「当たり前でしょ…悪魔蹴散らすのに森を燃やすバカがどこにいるのよ。」

鳴葉さん…そこにいる空音さんは「森を燃やすバカ」ですよ。

言い合いを空音さんと鳴葉さんが姿を見せると、意味もなく盛り上がり始める仲間たち。

「大丈夫ですか？羽に穴開いちゃったんじゃ、今回の戦闘には参加できませんね。」

と一応気を使って言う俺。ちょっと安心したのは秘密だ。微笑んで手を降りながら空音さん。

「やだな～　こんなの全然大丈夫だよ～　予防接種とおんなじくらいだよ～？」

と言って指を差した先の翼には、予防接種の針程の穴が３つ開いていた。確かに大丈夫そうだ…　ということは鳴葉さんは戦闘に参加するのか…　大丈夫かな…

そんな事を考えていると

パスン

何処からか音がしたとほぼ同時に、後ろにいた剣士の男の腕に木で

出来た矢が刺さった。

ぐぉぉっ！！　と上がる声、立て続けに何処からか鳴るヒュンという音、ぐぁっ！！という悲鳴。

誰かが口を開く

「おっ…俺たちは射たれてるぞ！！」

そう叫んだ男の背中にも、矢が刺さった。

「戦闘配備！！　闘盾士（バトルシールダー）は固まって構えなさい！！」

男の悲鳴とほぼ同時に鳴葉さんの声。

「救護班は負傷者を救」

そこまで言い、鳴葉さんが地面を蹴り、後ろに移動する。

カスンッ　音がした先は、鳴葉さんの足元、ほんの１０センチ先のところに矢が刺さっていた？

「救護班は負傷者の回復を最優先に行いなさい！！」

ここまで言い切ると、鳴葉さんは弓を素早く構え、矢を掴むように何もない空中を掴み、後ろに引いた。

放つ方向を矢の飛んできた方向に定め、手を離した先には、うっすら光の尾を引く魔法矢が飛んでいた。

カンッと音を立てて太い幹のに魔法矢が刺さる。
音に反応したように、カサカサッと枝が揺れ、水色の髪をたなびかせて、影が飛び移る。
「水色の髪…弓…察するに『レアージュ（悪魔のなかでも弓を使うのに長けている悪魔、傷を癒したり、悪化させたりする能力を持つ）』ね。　私に矢先を向けるとはいい度胸ね。私が追撃に向かうわ。」
そう言うと鳴葉さんは地面を蹴り上げ、碧色の翼で羽ばたき、「レアージュ」を追いかけて言った。
暫く沈黙が続く。
「まぁ…姉さん（あねさん）なら大丈夫だろ。」
と誰かが口を開く。
そうだな。　大丈夫だよな！　どっと声が上がる。
緊張が溶けて、皆が話を始める。
「皆」
いつもとは違う、真面目な声の、生命樹の上で望遠鏡で眺めているユーから声がかかる。
話声が止まり、沈黙がくる。
「私達ものんびりはしてられないみたいだよ。」

静まっていた場がざわりとする。

冷静に口を開いたユーの次に放った言葉は

「北北西の方角、９０メートルほど先に悪魔の一団を発見。敵数は２２０ほど、こちらに侵攻中だよ。」

ギルドの仕切り役、鳴葉さんが居ない今、攻め込まれたら、録な闘いが出来ない。

ざわざわと慌てる場、最初に北北西の森の方角に立ったのは

「純白の鎌」を構えた「死神」と

「純白の名機」に乗る「天才」だった。

「第三機構小隊！」「第五重兵装小隊！」

「特例、『空音』『シュウ』『ユー』は迎撃に向かう！　行くぞ！！」

二人の声が重なる。

どうやら俺は、二人の隊長（ガキ）に引っ張られて、悪魔の迎撃に向かうようだ。

浮遊して空中を滑るように移動する「死神」

前傾姿勢で地面を蹴りながら進む「天才」

二人を追いかけるように走り出した第三機構小隊と第五重兵装小隊、
その群れに混ざり、俺とユー、空音さんは悪魔迎撃に向かった。

クリスマス：邪の『ゲームオーバー』

「うわ…」

前線にての戦闘の参加に指定された俺が、「ユー」「空音さん」と共に移動した先は

二人の隊長（ガキ）と悪魔たちによって、既に血塗の戦場と化していた。所々には、頭の無い悪魔、胴体の焼けただれた悪魔、また、半身しか無い悪魔など、様々な死に様の悪魔の死体が転がっている。

「のんびり眺めてないで早く戦闘にっ！」

唖然と眺めていると、『死神』から声がかかる。闘えと言われても…

俺はある程度なら魔法は使える。剣術も多少は身に付けている。だが、だからと言って俺に戦闘技術がある訳じゃない。

取り敢えずは、戦場から少し離れた所で、ユーと身を伏せる事にするか。

「ユー、取り敢えず離れるぞ。」

死体をみて顔色がすっかり悪くなり、少々怯え、無言で頷いたユーの手をつかみ、１０メートル程離れた所の木の後ろに隠れ、戦況を伺う。

『死神』『マシン』『悪魔』入り交じった戦場は、なんていうか、とてもカオスだ。

そういえば、空音さんの姿が見えないが…

ふと周りを見渡し、すぐ隣の木の影に見つけた空音さんは

…悪魔の女性とキスをしていた。

「えっ…？」

思わず出る声、早鳴りを始める心臓。俺が思う事は一つ

『こんな時にGL（ガールズラヴ）？』

唖然。普段に見る光景なら、普通に興奮して鼻息を荒らげていた所だっただろう。だがここは戦場だ。

「んッ…」

悪魔の女性と空音さんの口から声が漏れる。

次の瞬間

ぶわっ！と音を立てて、悪魔の女性の穴という穴から、火が吹き出る。

目を閉じてキスをしていた空音さんの目がニヤリと妖しく笑う。

ぐったりと腕をうなだれ、目を見開いたままの悪魔の女性の腰から手を離し、口を離すと、悪魔の女性は崩れ落ち、口から煙を吐く。

ぐったりと倒れた女性はもうぴくりとも動かない。

「ふぅ〜…　あ…シュウ、見てた？」

こちらに気付いた空音さんが口を袖で拭い、バツが悪そうに口を開く。

「はぁ…見てましたよ。口から炎注いだんですか？見れば見るほど邪道ですね。エグイですよ。」

いやはや…ゴメンゴメン　と空音さん。

「それはともかくなんだけど、今から私さ…　あいつ殺りにいこうと思うんだよね。」

目を細めた空音さんの親指の先には、紫のローブを着た、男性が見える。だが、あれは友軍ではないのか？

「え、空音さん？　あれって友軍の人じゃないですか。」

そう言うと、あちゃぁ…と空音さん。

「シュウ、ちょっと我慢してね…　汝にふりかかる呪いの糸をほどきたまえ、カラクリム。」

キュィィィとガラスを釘で引っ掻いたような音が頭の中に響く。

「くぁぁッ…！！」

声が漏れる。足に力が入らない…ガクリと膝をつく。

頭に響く、嫌な音が消え、立ち上がった先に見えたローブの男は、俺の目には、悪魔の指揮官として命令を下す、悪魔としての姿が映った。

「どう？まだあいつが仲間に見える？」

ちょっと心配したようすの空音さんから声をかけられる。

「…いいえ。でも…なんで…？」

うんうん　と空音さんは目を閉じて頷き

「きっと森全体に呪文がかかってたんだね～。　まぁ簡単な例を上げると『普通、ゴーストが人間には見えない』って感じかな。」

成る程、悪魔が殺されても指揮官が殺されないならなんとかなるって訳か。

「ところで空音さんはなんで敵だって解ったんですか？」

「いや～、空音はさっき鳴葉からカラクリム食らったからね～」

成る程、あのときに竜化の呪と一緒に解けた訳か。

「でも、あんなのどーやって殺すんですか？　凄く強そうですけど…」

実際肉弾戦においては空音さんのほうが圧倒的に強いだろう。だが、あきらかに魔法において相手は熟練している様子だ。

「それはね～…　ゴニョゴニョ…ごにょり…」

成る程、この作戦ならいけそうだ。

俺の命は保証されては居ないが、空音さんが上手くやれば死なずにすむ。今回は空音さんを信じることにする。

一人にしないで…と半泣きのユーを「絶対だいじょうぶだから」となだめて、戦場にでる。

小型ナイフをとりだし、刃先を『ローブの男』に向け、小声で唱える

「氷柱の映える氷原よ、一度我に力を移し、矢先の花を貫きたまえ。カウル！」

ナイフの先から氷柱が数本発生し、『ローブの男』に向かって垂直に跳ぶ。

木の前で戦場を眺めている『ローブの男』はこちらを見ていない。

このまま飛べば男に氷柱が刺さり、貫通するだろう。

だが、氷柱は男の３０センチほど前で止まり、空中で砕ける。

「やっぱりな…」

予想通りだ。やはり相手の周りには防護結界が張られている（これで仕留められればラッキーと思っていたのは秘密だ）。

「お前か。」

体がふわりと浮く。まぁ浮くといっても、首を締め上げられるような感じなのだが。

冷静に主観話をしている今も…実は相当苦しい。

「なぜ解った」

感情のこもっていない声で男が言う。首が絞まっているので声は勿論でない。

「くぁッ…！！」

声が漏れる

「何故かは解らぬが、取り合えず殺す。」

大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だ…

自分に言い聞かせるも…意識は薄れる一方…

失敗か…？　空音さんを信じたのが間違いだったか…

薄れゆく意識のなかで、そんなことを考えていると

ドスッ…男の方から音がして、浮いていた体が不意に地面に落ちる。

「空音さん！」

殺ったか！　顔をあげると、そこには想像とは全く違う姿の空音さんがいた。

俺の目には『男の背中を貫通した剣を持つ空音さん』が写る予定だった。

少なくとも、そういう予定だった。

だが、実際俺の目に写った空音さんは『木にもたれ掛かり、地面に座り込み、首元に杖を当てられている、苦しそうな顔の空音さん』だった。

「空音さっ…ぐぁっ！！」

俺が言うや否や、体が浮く。

「両方殺す。まずはお前からだ。」

『お前』とはどうやら俺のことらしい。

大気圧が首だけにかかったかのように、首がしまる。

苦しい。俺はまだ死にたくない。でも、思いだけで死ななくていいなら、皆やってる。

嗚呼、死んだ。

『ジ・エンド』

『ゲームオーバー』

『人生終了のお知らせ』

地面に体が落ち、力泣く崩れ落ちる。

「『ジ・エンド』
『ゲームオーバー』
『人生終了のお知らせ』　…くくくッ
『おお勇者よ、死んでしまうとは情けない』」

俺が最後に聞いた言葉はこれだった。

「『アジ・ダハーカ』お前、女を泣かせるのが趣味なのか？良い趣味してるじゃねぇか（笑）」

…え？　どうやら俺はまだ生きているらしい。

『ローブの男』の方から聞こえる声。だが、その声はどこかで聞いたことのある…　少々幼い『男児』の声だった。

クリスマス：リボンとえっちな発想の『ティファレト』さん

「『リリーム＝バルシェンド』…！！なぜ貴様が…！」

シェンド…！　どうやら、俺は『死神』に助けられたらしい。

少々驚いた様子の『ローブの男』あらため『アジ・ダハーカ』

「覚えててくれたんだな。まぁなんつーか…理由を話せば長くなる。」

でもな…　と続け、言った。

「ゴキブリを殺す理由なんざ、『天気が良いから』で十分だ。つーわけで『地獄に還れ』。」

体に力をが入らず、身を起こせないので状況は解らない。

「待て、はやま」

『アジ・ダハーカ』にそのさきの言葉は無かった。

コロリ　とドクロに皮だけを張ったような、不気味な首が、俺の横に転がってくる。

相当不気味だ。

…沈黙

「ギャハハハ！！俺がこれくらいで死ぬと思うか！？　思ったか！？　思ったかァ？『リリーム＝バルシェンド』！！！」

突然生首の口が開き、鼓膜が破れそうな位の大声で叫ぶ。

「ほら離れろよ？　離れねぇとこの女殺すぞォ？　オラ離れろやァッ！！」

正直言って、うるさいからもうちょっと静かに話して欲しい。

右横に気配。どうやらシェンドが移動したらしい。

「そういえばお前からは『神麻大戦』で殺されたんだったなァ？　太古から大悪魔として君臨してたんだぜ俺ァ！　てめェから容易く殺された時ァ悔しくてたまんなかったよ！」

突然昔話を始める生首

「あれから俺ァ、『悪魔長』様から認められるまで！　認められるまで戦果を立てて！　やっとの事で！『身が分かれても死なない』力を貰い受けたんだぜェ！？」

黙って聞いていたシェンドが口を開く

「『身が分かれても』ね。」

「なんだ？　火の魔法でも使って体を焼こうってかァ？　俺の周りには結界が張られてんだよバアァァカ！　ギャハハハハ」

うるさいからもうちょっと音量を下げて欲しい。

「そんな野暮なマネしねぇよ。なぁ『アルエ』？」

「勿論、『魔法』なんて、ねぇ？　ふふっ」

背後から声、どうやら、後ろには『天才』の乗った『マシン』がいるようだ。

「そのデカブツで俺を焼こうってかァ？　甘いね！　撃ったら殺す！　弾が届く前にそこの女を殺すぞ！」

そうだった…あちらには人質が居るんだった。

「ところでなんだが、お前頭だけじゃ動けないのか？」

突然シェンドが言う。　なんだその質問…

「動けねぇさ　こっからじゃ見えねぇが、俺の杖先はしっかり女の首元に有るぜェ！？　感覚で分かるんだよ感覚でェ！」

「なら安心だな」

「？」

生首が疑問詞を浮かべる。

痛みも引いてきた。俺が身を起こすと

視線の先には、「涙目のまま、口を釣り上げた、空音さん」が頬を赤く染ていた。

「オラ、テメェの死角だよ。『アジ＝ダハーカ』」

シェンドの声と共に、開いた空音さんの桜色の唇の合間から、朱色の焔が吹きでる。

「ぇ…？　熱ッ…　うァ…　あ…」

現状が分かっていない様子の生首、きっと自分の様子が見えていない彼には、痛みだけが伝わっているのだろう。

「『消えろ』」

ギャァァァァァッ！！

シェンドの声と、生首の悲鳴が重なる。

長く続いた悲鳴。　一分程続いた悲鳴が、「ウゥ…」と言って途切れる頃には、『アジ＝ダハーカ』の胴体は、すでに焼けスミとなっていた。

どうやらコイツが最後の悪魔だったらしい。皆は既に帰っていて、悪魔の残骸だけが転がっていた。

「シェンド、アルエ、助かった。」

いや、本当に助かった。

「ほらさっさと立てよ。もうすぐ9時だ。　帰るぞ」

そう言って『世界樹』の方に歩きだすシェンド

すっかり痛みはとれた。立ち上がり、空音さんに行きましょう、と声を掛け、二人を追いかける。

数分ゆっくりと歩き、『世界樹』に到着すると

うぉぉぉっと歓声が上がる。なんか照れくさいな…

数人が木の根元で倒れている。　数人は顔など、所どころを血で染めている。

どうやら死者や負傷者は出てしまったらしい…

「無事で良かった。お帰り。」

鳴葉さんが笑顔で迎えてくれた。心が癒される。

「シュウにぃ…　お帰りなんだよ…」

ユーも先に帰って居たらしい。涙目な所を見ると、本気で心配していてくれたらしい。

「只今ですよ。鳴葉さんもユーも無事だったんですね。でも…何人か、死んじゃったんですね…」

「？」と疑問詞を浮かべ、後ろを振り向く鳴葉さん。

「あれ…？　確か誰も死者は出ていないハズなのだが…？　きっと疲れて寝てしまっただけだろう。付いている血は返り血ではないだ

ろうか？」

どうやら、彼らを殺害したのは鳴葉さんのようだ。俺は血の量が多いようで、気絶はしなかったが…

どうした？　さっきまでは大丈夫だったのに…　まさかステルスの悪魔がまだ居るのか？　と顔に血を滴らせる俺を本気で心配してくれる鳴葉さん。心配してくれるのは嬉しいんだが…

「鳴葉さん…　あの…　なんていうか…　弓の装飾が引っかかって…　ワイルドチャームのスカートがめくれてます…。」

鳴葉さんの後ろに背負って居る弓には、くるりと巻いた様な装飾が施されている。それが引っかかって捲れた鳴葉さんの本来なら隠れて居るハズの場所には、『ピンクと白のしまもよう』が覗いていた。

「え？　あ…　おおおっ…お前らッ　わっ…私に欲情して鼻血を出したのかッ…！？」

自分の後ろを覗き、顔を真っ赤に染めて、叫ぶ鳴葉さん。

でへらと顔をニヤつかせる面々。空音さんも「うふふ」と微笑んで見ている。鳴葉さん怒っても可愛いよなぁ…

「お前らッ　ええい！　覚悟しろよッ」

鳴葉さんが叫んだ瞬間、パァ…と『生命樹』が輝く。

おぉ…何か起こるのか…！？

輝き…元に戻った。

えぇ～？　と上がる不満の声。

『…んー、皆護衛有難う、無事精霊化を遂げる事ができたよ～』

上から聞こえる様な澄んだ声、だが上を見上げても何もない。どこから聞こえてんだ？

ざわついて周りを見渡す面々

『ここだよココ　…っていっても見えないか、ちょっとそこのお嬢さん？』

お嬢さんとは誰の事をさしているのか？　まぁ少なくとも俺じゃねぇけど

『そこの碧のお嬢さんだよ、なんだ、このままじゃ私の事見えないみたいだから、「転生」かけてくれる？』

軽い口どりで言う声。おいおい、転生したらもう戻れないのしってんのか？

「解りました、では…」

転生陣を書き始める鳴葉さん。マジかよ。

『おいおい、反心転生じゃ私が悪い心な人になっちゃうぞ』

いい人なんですね、解ります。

「はぁ、でも私、これ以外方陣かけませんよ？」

「あ、俺書けます。」

つい名乗りを上げる

『おっ？　じゃあそこの君、木の周りに方陣を書いてね。』

しゃーなし。ゆっくり木の周りに円を書き、中に文様を書き入れる。

「境獣の身の入、姿を纏いし魂達よ、身の代を変え、悪行を不服せよ！」

光が木を包む。

抑えるような喘ぎ声、叫び声、その他諸々が聞こえる。

光が消えると、そこには

ネイティブな金髪の美少女が、リボン一本だけを身に纏い、座っていた。

…『死亡者多数』

ぐは…俺…血が多くて良かった。

目を手で覆う鳴葉さん。　うふふ、とニコニコ見守る空音さん　おぉ～、と歓声を上げるユー

「…うん、メリークリスマス！　無事転生出来たね。　皆ありがと！」

リボン（仮名）が言う。

「じゃー皆ありがとー。じゃっ、私もう行くね～」

よっと、と言って立ち上がり、歩き出すリボン（仮名）

うわ…あっさり…

「…クリスマスプレゼントは？」

生き残っていた男性のうち一人が言う。

うわ…よくぞ恥ずかし気もなく言えるな…

「え～…クリスマスプレゼントぉ？　困ったなぁ…私なんにももってないんだよね～、そこに成ってる禁断の果実でも食べる？　この世界から追放されるけど」

食わねぇよ

「いや…いいっす…」

「んー困ったなぁ…じゃあしょうがない、トッテオキがあるんだ～。ふふふ、『トッテオキ』…あげちゃう♪」

あるなら先に言えよってね。

「はい、あげる♪」

「…はい？」

笑顔で言うリボン（仮名）　まさか笑顔がプレゼントとかそんなベタな台詞いうんじゃ…

「解んない？　だーかーらー…」

だから…？　むっとしてから俯いて、ちょっと顔を赤く染める

「あぁもうっ、誰もわかんないの？　之言うのちょっと恥ずかしいんだよね…　ほら、だって私ほら、行く宛とかないし？　ね？　解んない？」

さっぱり解らない、何をいっているんだこの娘は…？

「もう！　鈍感な人たちだな…　だから上げるってほら…　『わ・た・し』…プレゼントにあげるから連れてって！」

…『生存者微数』

生きていた連中も鼻血を吹いてぶっ倒れた。

「わ、分かった。　お前は私達の仲間になるというのだな？　分かった…連れていってやるから早くその破廉恥な格好をやめなさいっ」

鳴葉さんがいう。

「え、えへへ…でも私これ以外もってないんだよね～、服」

マジかよ　まぁ、そうか…

「ま、まぁいい、皆、早く街に帰るぞ！　宴の準備だ！」

と鳴葉さんは勇むが、皆死んでいる。

「はぁ…まったく…破廉恥な連中だ…　そいつらは置いて帰るぞ、その内来るだろう。」

「そ、そうですね。後で帰って来るハズ…はは。」

まぁ…大丈夫だろ…　大丈夫なハズ

「さて、今夜は聖夜祭だ！　皆で盛り上がろうぞ！」

おぉー！　一部の声は上がるが、イマイチ盛り上がらない。

やっぱり…モブキャラって大事だなぁ…

改めて実感した。

まぁ今夜も、聖夜を楽しもう！

正月：あんあわりあるファンタジー展開中（前書き）

クリスマスの夜…俺たちは一晩中飲みあかした。

そして今は7日後、１２月３１日、今年最後の日だ…って…

飛ばしかた雑ッ！

鳴葉「ちょっと！　なにこの雑な飛ばしかたわ！！」

シュウ「い、いや、しょうがないんじゃないですか…？ほら、作者の都合ってやつで」

空音「うふふ～　でもお正月前って一番盛り上がる時だよね～。」

アルエ「作者はそんな大事な7日間を飛ばしてただですむと思ってるのか！？」

シェンド「まぁ、思ってたから飛ばしたんだろうけどな。」

鳴葉「私がお灸を据えてやらねばならないようだな…」

シュウ「え…鳴葉さん何する気ですか…？」

リボン「何ってそれは、俗に言う『お楽しみ』って奴じゃないの？」

ユー「にゃあ、まぁ許してあげてもいいんじゃないかな～？って言えってあそこにカンペが」

空音「あ～あ…墓穴掘ったねー…」

鳴葉「どうやら全く反省してないようだな。アルエ、シェンド、ちょっと付いてきてくれ。」

シェンド「解った」

アルエ「りょーかいー」

シュウ「えっ？鳴葉さん、どこ行くんですか…？」

鳴葉「鬼退治（仮）」

シュウ「ちょっ…！　待ってください！ホントすいませんでした！！　間は外伝として後で書きますからッ　折檻はイヤァァァァ！！」

ユー「シュ…シュウにぃ…怖いよ…」

鳴葉「な、何を突然土下座をして叫んでいるのだ…」

空音「シュウは『踏んでください』って言ってるんだよ～　鳴葉に（笑）」

鳴葉「シュ…シュウ…お前がそんなドＭ野郎だとは思ってなかったよ…」

シュウ「ま、待ってくださいよ！！　なんか体が勝手に…！！」

ユー「作者権限って奴だね～」

シュウ「そうそれだ！！　って鳴葉さんは？」

空音「ハイヒールを取りにいったみたいだよ～」

シュウ「ちょっ…踏む気満々じゃないですか…って痛ァ！！」

鳴葉「どうだ…？シュウ、気持ちいいか…？」

シュウ「あがっ…痛ッ…い…痛いですよっ！」

ユー「『好きなだけ踏んでください』ｂｙカンペ」

空音「うふふ～」

アルエ「なむなむ…」

シュウ「痛ッ…あっ…でもちょっと気持ち…」

ゴリッ

鳴葉「あっ…」

シュウ「いッ…イヤァァァァァ！！」

※作者より誠にお詫び申し上げます

正月：あんあわりあるファンタジー展開中

…もう一度いう。

あれから7日後、つまり１２月３１日

俺は鳴葉さん宅（現在居候中）の和室でコタツに潜り、テレビを見ていた。

「ていうか鳴葉さんちって和室あったんですね。あとテレビとコタツも。」

ちなみに俺が寝泊まりしている部屋は全体的に真っ白の、とにかく真っ白な洋室だ。

まさか鳴葉さんの家にこんなにほっかりした部屋があったとは

「そりゃあるよ。冬は冷えるし毎年紅白を見るのは楽しみだし。」

『紅白』つまり歌合戦

まぁ年末の楽しみの一つだな…ってこれファンタジーじゃ…やっぱりいいや。

「ちなみに紅白が終わり次第、カウントダウンがあるからな。」

「にゃぁ？紅白って新年までやるんじゃないの？」

「いや、紅白は１１時４５分で閉幕だぞ。」

嗚呼、なんだろう、なんか違和感。わかってると思うがこれはファンタジー小説だ。

「ちなみにシュウよ、和服は持っているのか？」

「は？和服なんて持ってませんよ。最低限必要な物だけ持ってきたんですから。」

元々持ってないけどね。

「そうか…では来年までに買っておくように」

「マジですか？」

「あぁマジだ。」

マジかぁ…　和服って高いんだよな…　金の使い所が増えた。

「ちなみにユーの分は借りてある。」

「やったぁ！　どんな柄の～？」

嬉しそうにしているユー

良かったなぁ…ってユーだけ！？

「鳴葉さん…あの、俺の分は…」

「無い。」

「ですよねぇ…」

ちょっとしょんぼり

「そういえば鳴葉さん。空音さんは呼ばなくていいんですか？」

「ああ」

「え～？　仲良いのに呼ばないの？」

「ああ」

だって…と続ける鳴葉さん

「呼ばなくてもくるし。」

ぴんぽーん

チャイムが鳴る。なんてナイスなタイミング。ほらね、と鳴葉さん。

「やっほー鳴葉！！　空音ちゃんが遊びに来たよ～！」

明るい声、紛れもなく空音さんの声だ。

「入りなさい。」

といいながら部屋を出て玄関まで出迎える鳴葉さん。可愛いじゃないか…

「ふむ、このみかんは中々実が締まってて美味いな。」

うおっ！　いつの間にか俺の隣でシェンドがコタツに入っていた。

「お前いつから居たんだ…」

「お前が『ってこれファンタジーじゃ…』って思ってた辺りからだ。」

さいですか…

「お、シェンド！　ユーちゃんも！　あ、シュウも居たんだ～（笑）」

この人はざっくり、遠回しに酷いな…って…あれ？

水色地に赤トンボの和服、本来なら夏に着るものだが、ピンポイントに真っ赤な空音さんに、びっくりするくらい似合っていた。

「今年もそれか」

しれっと言うシェンド

「わ～、空音さんきれーなんだよ～」

目をきらきらさせて言うユー

「…」

見とれる俺。

「おい何をボケッとしている？紅白が始まってしまうぞ。」

鳴葉さんの呆れた声。

「おぉ～、鳴葉、記録更新だね～。　３分２１秒だよ。」

「よし、まぁ年々早くなってるからな。」

へ？何が？　って…

鳴葉さんは和服に着替えていた。首回りにふわふわしたの付いてる桜色の和服。所々に白で模様が刻まれている。

おぉ…最高に似合うじゃないか…

「さて、そろそろ始まるな。」

「何がですか？　ていうか鳴葉さん俺と結婚しませんか？　いややっぱりなんでもないです。」

「紅白だ。　それと結婚はしない。」

「さいですか…」

「おい鳴葉、俺は『絶対に○ってはいけないエア○ート』を見るつもりで来たのだが…」

「シェンドよ、我が国の東方の文化を守って紅白を見るのが国民の勤めだ。」

「そうか…まぁ『絶対に○ってはいけないエア○ート』は１２時４５分には終わらないし、いいか。」

嗚呼年末の美しい雑談風景だなぁ…って…これファンタジーじゃ！？

「あの…これファンタジーじ」

「シュウ～、紅白始まるから静かに～」

「あ、今年も大林幸子（仮名）は凄そうだな。」

「なんか、獅子舞の上に乗るんだよね～」

「ふぇ～、にゃぁ、私紅白見るの初めてだから楽しみなのです～。」

「レディ・ガカ（仮名）も生で写るんだろ？」

「そうなのか？」

「確かだけど」

嗚呼、もう物語がズレまくっててわかんねぇよ。

お、やっぱり今年も司会は嵐（タイフーン）なんだな。

「うわ…ぶっちゃけＡＫＰ４７（仮名）って顔と名前一致しねぇよな…」

「整形疑惑も浮上し」

「ぎゃー、そんなこというな！　いろんな方面から怒られるから！！」

「…それもそうだな」

嗚呼、話がリアルだ。

まぁ皆楽しそうだし…まぁいいか。

それではのんびり紅白を見ることにしますかぁ

嗚呼、皆でコタツに入って紅白鑑賞…幸せだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3859z/

幻獣ぱれっと!

2012年1月6日01時46分発行